

# 想起に関する研究

—社会教育（自己教育・相互教育）の原理をたずねて—

## A Study on Recollection

—Searching for Principles of Social Education (Self-education or Inter-education)—

畑 潤  
Jun HATA

### 人間の徳性は教えられるか—『メノーン』の問いかけ

プラトーン（Πλάτων《B.C.427年～B.C.347年》）の対話篇『メノーン—徳について—, ΜΕΝΩΝ—Η ΠΕΡΙ ΑΡΕΤΗΣ' ΗΕΙΡΑΣΤΙΚΟΣ—』に、心に残りつづける問いかけがある。それは、“徳は教えられるか” というものである。『メノーン』の冒頭の、ソクラテース（Σωκράτης）に対するメノーン（Μένων）の発問は次のようである。

「人間の徳性（ἀρετή, virtue）というものは、はたしてひとに教えることのできるものであるか。それとも、それは教える（διδάσκω, teach）ことはできずに、訓練（ασκητός, practice）によって身につけられるものであるか。それともまた、訓練しても学んで（μαθησις, learning）も得られるものではなくて、人間に徳がそなわるのは、生まれつきの素質（φύσις, by nature）、ないしはほかの何らかの仕方によるものなのか…。」

（以下、日本語訳は藤沢令夫氏による岩波文庫版『メノン』による。なお小論では、日本では慣例的になっている表記、たとえば「ソクラテース」は、古典ギリシア語の発音により近い「ソクラテース」と表記する。したがって、岩波文庫版『メノン』も『メノーン』と表示するなど、訳文中の固有名詞を含め、表記を統一させた（ただし、研究著書名はそのままとした）。なお、ph音はプで表した。またギリシア語と英語との対応は、とくに指示がない限り、HARVARD UNIVERSITY PRESSのThe Loeb Classical Libraryに拠る。しかし、両者のことばの成り立ちの違いから、一語だけを取り出して対応させることはそもそも不可能である。したがって、ギリシア語については、英語との対応性を配慮しつつ、ことばの基本的意味を把握することを意図し、原文中で使われている格を直した箇所もある。なお、ギリシア語の氣息記号等は印刷の便宜上省略した。）

このような問いかけをもつ『メノーン』を主対象に、いくつかのことを考察してみよう。まず思うことであるが、プラトーン（ソクラテース《B.C.469年頃～B.C.399年》）（注1）は、何故こういう問いを着想したのであろうか。そして、その問いをどう考えたのであろうか。この問いをめぐる時代環境に関わって、トゥーキュディデース（Θουκυδίδης）の『歴史ΘΟΥΚΥΔΙΔΟΥ ΙΣΤΟΡΙΑΙ』（あるいは『戦史 The History of the Peloponnesian War』とも訳される）に目を向けてみよう。

トゥーキュディデースは、その著において、ペロポネーソス戦争（B.C.431～B.C.404）の進行に応じて生じた人心の道徳的荒廃のさまを詳細に明らかにしているが、彼はまた、アテナイの、その“黄金時代”に活躍したといわれる指導者ペリクレス（Περίκλῆς《B.C.495年頃～B.C.429年》《注2》）など、高尚な精神（人格）が存したことも、その演説の記録ということをとおして詳述している。同様にソクラテース（プラトーン）も、『メノーン』において、「この国には、現在においても、また現在におとらずすでに過去においても、国事に関してすぐれた（καλὸς καγαθὸς《注3》 good, honourable）能力をもつ人たちがいたと思う」と述べ、アニュートス（Ἀνυτοῦς）との対話では、テμισトクレス（Θεμιστοκλῆς）、アリステイデース（Ἀριστείδης）、ペリクレス、トゥーキュディデース（Θουκυδίδης…上述の歴史家とは異なる）等を優れた人物の例として挙げている。（注4）そして、彼等の、その息子たちに対する教育の成果について吟味しているのである。彼等は、結局自分たちの息子をすぐれた人物に育てられなかったのではないか、という批評をとおして、ソクラテースは、「わが友アニュートスよ、徳は教えられることのできないものだというのが、事実なのではないだろうか」と推論するのである。（注5）

「徳性」というものの存在と、その育成如何をどう考えるか。これは、“徳の師”としてのソフィスト（注6）の登場とともに、「当時の流行の論題」（岩波文庫『メノーン』の藤沢氏の解説）となっていたのであり、『メノーン』においても、ソクラテースの問いかけに対するアニュートスのことばとして、「…あんな連中のところへ行行って害毒を受けるような狂気の沙汰は、絶対に誰にもさせたくない。じつに彼らこそはまぎれもなく、ともに交わる者たちに害毒をあたえ、墮落させる連中なのだから。」とソフィストが厳しく論難されているが、徳をどう考えるかは、ソクラテース（プラトーン）によって、問いとして深く意識され、探究されていったと言えよう。

さて、『メノーン』の冒頭の問いに対するソクラテース（プラトーン）の推論的結論は、「徳とは、生まれつきのものでなければ、教えられることのできるものでもなく、むしろ、徳のそなわるような人々がいるとすれば、それは知性（νοῦς understanding）とは無関係に、神の恵みによってそなわるものだということになるだろう」というものである。この推論を導く論理の骨子は、私の理解によって要約すれば、次のようになる。

徳につらなるものとして、例えば「勇気 ἀνδρεία, courage」というものを吟味してみると、「知」と切り離された勇気は、一種の“空（から）元気”という現象が生じるのであり（注7）、徳と知とは深い関連があると考えられ、したがって知と関連がある以上、それは生得的なものとはいえないことになる。しかし、経験的に「徳の教師」は見出し得ない（徳に関しては「教える者 διδάσκαλος, teacher」も「学ぶ者 μαθητήτης, learner」もない）以上、徳を教えられ得るものと考えすることはできない。そうであるならば、徳というもの（の本質）は、神の恵みによってそなわると考える他ないことになる。

プラトーンの、『メノーン』における徳に関する推論的論理の骨子は、以上のようなものである。このようにプラトーンは、『メノーン』の主題は幅曠しており統一ある読み取りは容易ではないが、私の理解では）まずは徳と知との連関を示唆し、そのことによって徳が生まれつきによるのではないとし、しかしまた、経験上、徳は教えられない（学び得ない）ものであるらしいということから、徳の本質は知ではない、と洞察するのである。（注8）

注1 ソクラテースは著作を残していない。プラトーンの対話篇ではソクラテースが登場し

て語るわけであるが、ソクラテースその人の思想とプラトーン思想とは区別はできない。諸先行研究において考えられているように、プラトーンの初期の作品ではソクラテースその人（のことば）がより正確にたどられていて、ある時期以降の対話編では、ソクラテースのことばを含め、プラトーン自身の思想の展開が色濃くなっていると考えるのが妥当だろう。小論では、ソクラテースとプラトーンとは分かちがたいものであるという意味で、しばしば並べて表記した。アイデア論評価を中心にした、ソクラテースとプラトーンの連続・不連続に関わる探究は、機会を改めたい。

注2 第六節の注1を参照されたい。

注3  $\kappa\alpha\lambda\omicron\varsigma$  と  $\alpha\gamma\alpha\theta\omicron\varsigma$  (the good) とが一つながりのものとして使われており、“美しく立派な” “善美の” という意味内容をもつ。なお、同属語として  $\kappa\alpha\lambda\omicron\text{-}\kappa\alpha\gamma\alpha\theta\iota\text{-}\alpha$  (善美であること  $\kappa\alpha\lambda\omicron\varsigma$   $\kappa\alpha\iota$   $\alpha\gamma\alpha\theta\omicron\varsigma$ ) という語もある。『メノーン』の「ひとかどの立派な」と訳されている  $\kappa\alpha\lambda\omicron\varsigma$   $\kappa\alpha\gamma\alpha\theta\omicron\varsigma$  は、The Loeb Classical Library版では、gentlemanをあてている。同様に、『メノーン』において「美しい」と訳されている  $\kappa\alpha\lambda\omicron\varsigma$  が、admirableとされている箇所もある。このように、『メノーン』においては美と善とが同質的に論じられる傾向があるが、そこには倫理的ニュアンスが基調にある。また、『クリトーン  $\text{Κριτων}$ 』では、ソクラテースのことばとして「善く ( $\epsilon\nu$ ) 生きることと美しく ( $\kappa\alpha\lambda\omega\varsigma$ ) 生きることと正しく ( $\delta\epsilon\kappa\alpha\iota\omega\varsigma$ ) 生きることとは同じだ」 (living well and living rightly are the same thing) と述べられている (訳は久保勉『ソクラテースの弁明 クリトーン』岩波文庫、による)。ここに見られるように、英語では、「善く ( $\epsilon\nu$ )」と「美しく ( $\kappa\alpha\lambda\omega\varsigma$ )」とが一体的に「well」(申し分のない) と訳されている。

なお、プラトーンにおける「善」「美」の関連については、松永雄二著『知と不知—プラトン哲学研究序説』東京大学出版会、1993年、でも論及されている。

注4 「すぐれた人物」は、プラトーンのことばでは、国家=ポリスを導く政治家が中心的に例示されている。しかし、私の判断では、プラトーン思考においては絶えずソクラテースその人が深く意識されていると思われる。プラトーンの対話篇ではソクラテースを登場させるのであるから、当然のことながらソクラテースが自身を賞賛するわけにはいかない。

注5 このことは、歴史を超えて、(家庭)教育論の真実を語っている。教育の根源は、成長における子ども自らの自主的格闘の良さに潜む。なお、プラトーンは国家の守護者たるべき者を吟味するにあたって、“血統” というものにとらわれない、いわば“能力主義的平等性” というべき人間評価の基準を提示している (『国家』)。

注6  $\sigma\omicron\phi\iota\sigma\tau\eta\varsigma$  (ソピステース) は、“一芸に秀でた者” “専門家” “知者” “学者” “ソフィスト” “詭弁家” という意味をもつ。

注7 この論点は、“勇気があるならやってみろ!” といった、青少年期の“悪” への誘いの心理・論理など、多くの“徳の問題” に触れるものがある。同時にこの論点は、私は、より社会的・歴史的問題としても吟味すべきだと考えている。例えば、教育学者である五十嵐顕氏は、日本戦没学生手記編集委員会編『きけわだつみのこえ—日本戦没学生の手記』(東大協同組合出版部、1950年—初版:1949年(引用者)—) に光をあて、加藤周一氏の「わたくしは、日本の学生達が死地に赴いたのは、もちろん強制されたからであるが、単に聖戦というような空虚な標語が彼らを動かしたのではなく、倫理的な力が彼らを動かしたのだと思う。

…戦争はりっぱな青年から殺す、戦争挑発者は美德を動員する」という文言を引きつつ、戦後教育改革の課題を、青年を犠牲にした「強制」と「自発」との双方に渡るものとして考究している（『現代の教育制度・政策と子どもの発達』（『岩波講座 子どもの発達と教育1』1979年、所収）。この主題における五十嵐氏の、その後の生涯にわたる探究の持続は、明らかに自己に関わるものであり、思想的なものである。五十嵐氏の、道徳教育論の根幹にかかわる問いとして、機会を改めて、氏の探究の足跡から学ぶことを試みたい（五十嵐氏によって引用された加藤氏の文言は、五十嵐氏によれば、『わだつみのこえに答える—日本の良心』東大協同組合出版部、1950年、からのものである）。（第四節の注4に関連する）

注8 「教育改革国民会議」（首相の私的諮問機関：座長＝江崎玲於奈氏）の審議経過報告（2000・7・26）の第一分科会（人間性）報告で、「教室で道徳を教えるのに、なんでためらう必要があるか。」と、＜道徳を「教える」＞という根本思想を表明している（曾野綾子氏の文責になるもの—『日本教育新聞』2000年8月11・18日、による）。私は、＜道徳の「教育」＞という理解と＜道徳を「教える」＞という理解との間には本質的な違いがあると考えている。

ところでM・ドベス（Maurice Debesse）は、道徳性の発達というものを、保育期（l'age de la nursery）から青春期・情熱の時代（l'age de l'enthousiasme juvenile）へと、＜人間性への教育éducation à l'humanité＞（ペスタロッチJ.H.Pestalozzi1746～1827）という人間についての思想を豊かにしていくものとして、その発達論の基軸にすえて考察している（Les étapes de l'éducation,1952、訳は堀尾輝久・斉藤佐和訳『教育の段階』岩波書店、1982年、による）。例えば若者に固有な「情熱enthousiasme（熱狂・感激）」という感受性（sensibilité感性）は、「思慮のない野心家におだてられて野蛮なイデオロギーに奉仕した青年教育の痛ましい結果」への批判の眼と注意深く結んで、肯定的にとらえられている。私には、ドベスの、とくに青年期の探究に示された「性格（caractère）の教育」「人間的自由（liberté humaine）」「人間人格（personne humaine）」を問いつづける視点は、ドベスによって直接的に言及されていないが、プラトーンの思想とその継承の歴史抜きには理解できないもののように思われる。（第四節の注8に関連する）

## 「教えられ得るもの」と「教えられ得ないもの」

さて、この推論のなかで、プラトーンは知と徳との関連についてどのように捉えているであろうか。このことに、少し丁寧に光りをあててみよう。プラトーンは、徳の性格＝本性に関わって、教えられ得るものと教えられ得ないものについて、次のように吟味している。

過去および現在においてみとめられる「徳」のある人物、つまり「すぐれた（ἀγαθός, good）人物たち」「人間としてすぐれた（ἀγαθός, good）者」あるいは「すぐれた（καλός κκαγαθός, 英訳ではgood, honourable）人物」の本質は、「善きもの ἀγαθὰ, good things」であること、「有益 ωφέλιμος, useful,あるいはprofitable」であること、つまりわれわれの行為（πράγμα, conduct）を「正しく導くこと」（ὀρθὸς ἡγευσθαι, right guidance）にある。（注1）ところでわれわれの行為を「正しく導く」ものには、二つのものがある。その一つが「知 φρόνησιςプロネーシス」であり、もう一つが「正しい思わく ὀρθὸς δόξα,

right opinion] である。

この「プロネーシス」について、藤沢氏の訳の場合、「知」でほぼ一貫した訳の対応をとっている（一部で「知恵」とも訳されている）が、英語訳では、プロネーシス（知）をwisdomと訳している部分と、knowledgeと訳している部分とがある。なおσ ο φ ι αソピアーを、藤沢氏は「知」または「知恵」と訳し、英訳では多くの場合wisdomという訳をあてている（accomplishmentsと訳している箇所もある）。また『メノーン』において使われているε π ι σ τ η μ η（エピステーメー）を、藤沢氏は「知識」と訳し（英語訳knowledge）、またν ο ο ς・ν ο υ ς（ヌース）を藤沢氏は「知性」（英語訳sense, understanding）という訳で一貫させている（ただし、ソクラテースが引く「エレゲイア詩」の訳ではν ο ο ςを「知恵」と訳している）。

いずれにせよ『メノーン』においては、私の判断では、プラトーンはエピステーメー（知識）とヌース（知性）、プロネーシス（知）、およびソピアー（知・知恵）を、δ ο ξ α（ドクサ, opinion）との対比において、教えられ得るものとして同類的に論じている。（注2）

ところで、ドクサは「思わく」と訳されているが（注3）、この「思わく」は「思ふ」の名詞形で、“思うこと” くらいの意味であるが、『メノーン』の中の、例えばソクラテースのことは、「ある人が、その道を実際に通ったことがなく、ちゃんとした知識をもっているわけでもないが、しかしどの道を行けばよいか見当をつけて、その思わく（思いなし）が正しかったような場合…」というような使い方から判断されるように、ドクサとは、一人の（その人の）主観的・主体的・総合的・能動的・実践的な直感あるいは判断、というべき能力あるいは資質のこのように私には思われる。少なくとも、このドクサは、教えられないものとして、しかしやはり生得的ではないものとして在り、プラトーンは、このドクサの働きのなかでも、「正しい思わくδ ο ξ α ι α λ η θ ε ι ς, true opinions」「思わくのよさε υ δ ο ξ ι α, good opinion」にこそ、徳（アレテー）の本質（注4）は関連しているだろう、と論じている。（注5）

注1 プラトーンの言う「すぐれた」（アガトス α γ α θ ο ς）という人間像把握に関わって、次のようなことを考えてみたい。

教育学者である勝田守一は、論文「イエーガーの〈パイディア〉」（1962年）において、古代史学者イエーガー（W. Jaeger）による研究を受けて、「どこの社会でも訓練や養成（職業的技術や道徳的な規律〈神々をうやまえ、父母をうやまえ〉など）は存在している。しかし、それとは異なった次元で、人間形成を自覚したのがギリシア人であり、そのことは人類の最初の出来事である」と述べている（『勝田守一著作集』国土社、1973年、所収）。このようにパイディア（教養）の思想を意識し、それを人間・教育の原理的な認識として継承するか否かは、教育研究に向かう者にとって、探究的試練というべきものになるであろう。この教育認識の問題は、広範な意味をもっており機会を改めて論じてみたい。

ここでは、一例ということであるが、日本の自己教育運動史の一つである、大正から昭和にかけての「自由大学運動」の評価をめぐる問題について触れておく。宮坂広作氏は、著書『近代日本社会教育史の研究』（法政大学出版局、1968年）において、「信南自由大学趣意書」（1923年）を、「戦前日本にあって社会（成人）教育に関して語られたもろもろの提言のなかで、もっともすぐれたもののひとつ、記念碑的な文書として高く評価する」と述べているが、自由大学についての結論的評価は、「教養主義という致命的欠陥から自由ではありえなかった」というものであり、土田杏村の思想についても、結論的には、「…マルクス主義の『歴

史的止揚』を試みたモダニズム的修正主義であった」、あるいは「ブルジョア左派、プチ・ブル的社会民主主義の立場にほかならない」、と評している。国立教育研究所編『日本近代教育百年史 7』（1974年）における自由大学についての記述（小川利夫氏の執筆）は、歴史実証性に重点が置かれており、評価をめぐる論議については意識して回避されているようである。大申隆吉氏の著作『日本社会教育史と生涯学習』（エイデル研究所、1998年）では、上田自由大学と伊那自由大学との違いが、後者のもつ思想に前者の限界を克服する内容があるという文脈において、とくに注目されており、同様に、土田の労働観について、「土田は、労働を『生命の創造的表現』と人格主義的にとらえ、自己の生活費を得るためのみにとらえるのを否定した」と、ネガティブに評され、金井正の発言（1935年）を紹介しつつ、それを、「農民の生活・労働の課題と結びつく点で弱さをもった上田自由大学—土田の文化主義を克服する方向を示したものと評されている。ここに挙げた三者のものは、いずれもすぐれた先行研究というべきである。（\*）さて、歴史的な自由大学運動の的確な評価は、土田杏村の思想自体をどう評価するかにかかってくるが、そのためには、歴史研究と（教養）思想研究との双方の探求が伴わなければならないだろう。私（畑）は、拙論において、戸坂潤による土田杏村批評（土田杏村は「思想家ではなかった」）を注記したことがある（『教育思想研究方法の一試論—戸坂潤の世界とその歴史的評価をめぐる—』、中央大学教育学研究会『教育学論集 第27集』1985年3月、所収）。土田の思想それ自体をどうクリティークするかは、その注記以来、私自身にとっての課題となっているが、その課題に向かうためには、私は（歴史的にはI、カントの思想を経由するのであるが）プラトーン思想（教養論）にまで遡る必要があると感じるようになっていく。とくに留意したいのは、プラトーンが「すぐれた」資質というものを論じるとき、それは社会から閉ざされた内心のことを言っているのではなく、国家（ $\pi\omicron\lambda\iota\varsigma$  state）の「守護者」 $\phi\upsilon\lambda\alpha\varsigma$  guardian」たるべき者の資質として考察しており、したがってその資質をさまざまに「試す」＝「試練」にかける（ $\beta\alpha\sigma\alpha\nu\epsilon\zeta\omega$  test）ということ述べている、ということである。プラトーンは、そのような考察を人間に普遍的な「正義」の究明のためにおこない、人間の自由な精神に（世論に）よびかけようとしているのである（『国家』）。プラトーンは『国家』において、こう述べているのである。「すべての状況においてその人が、たぶらかしに対する抵抗力と端然とした品位を示すかどうか、自己自身を守り、自分が学んだ教養（音楽・文芸—ムーシケー  $\mu\omicron\upsilon\sigma\iota\kappa\eta$  culture\*\*）を守るすぐれた守護者として、自分が身につけたよきリズムとよき調和をそれらすべての状況のなかで保持し、かくて自己自身にとっても国家にとっても、最も有用有為の人物でありうるかどうかを」見守らなければならない、と。（\*\*\*）

\* 関口安義氏は、近著において、上記宮坂氏の著作で示されている自由大学運動に対する評価を、「ややかたくなな教条主義的考えのように思われる」と批判している（『恒藤恭とその時代』日本エディタースクール出版部、2002年）。

\*\* 「音楽・文芸」と訳されているムーシケーは、多くの場合musicと訳されている（『国家』など）。（第5節の注1を参照）

\*\*\* プラトーンの正義論における「実践（ $\pi\rho\alpha\varsigma\iota\varsigma$  プラクシス）」については、拙論「ヒューマニティの探究—“自分さがし”ということ—」（『月刊社会教育』1997年12月増刊号、所収）でも論及した。

注2 英語のwise（名詞形wisdom）は、古期英語では、“よく知っている”という意味をもつ

(したがって、wisdomには「学問」「知識」という意味もある)。なお、『国家』の英訳においては、 $\sigma\phi\epsilon\alpha$  (ソ피아) はwisdomと訳されているが、 $\epsilon\pi\sigma\tau\eta\mu\eta$  (エピステーメー) がwisdomと訳されている箇所もある。『メノーン』で使われている $\mu\alpha\theta\eta\mu\alpha\mu\alpha\tau\epsilon\mu\alpha$  (「学問」) は、“聞き知ること” “学んだこと”、そして“学問” “数学” という意味がある。英語のmathematicsはギリシア語の“学ばれたこと” に由来する。またマテマと同類語の $\mu\kappa\theta\eta\sigma\epsilon\iota\varsigma$  マテシスは、“知ること” “学ぶこと” “学習” や “学ぶ能力” “知ろうとする意欲” “教育” という意味がある。エピステーメーには、“通曉していること” “熟練” “知っていること” “学知” “学問” などの意味がある。

注3  $\delta\omicron\varsigma\epsilon\alpha$  は、古川晴風編著『ギリシャ語辞典』(大学書林、1989年) では、その第一の意味として「(主観的な) 考え、思い、意見、見解、判断、信念;推測、想像、臆断」を挙げている。藤沢令夫氏はドクサを、たとえば『パイドロス』(岩波文庫)において、「分別」とも訳している(該当箇所の英語訳はopinion)。なお、以下、『パイドロス—美について—、ΦΑΙΔΡΟΣ—Η ΠΕΡΙ ΚΑΛΟΥ ΚΑΙ ΚΑΙ ΚΟΣ』からの引用は、この藤沢訳の岩波文庫版による。(ηθεκοςは、「道徳的な」「倫理的な」という意味。)

注4 プラトーンがいう本質とは、「ある一つの同じ相く本質的特性」 $\epsilon\iota\delta\omicron\varsigma\tau\alpha\upsilon\tau\omicron\nu$ , one common karakter)、あるいは「同じ相く本質的特性」 $\tau\alpha\upsilon\tau\omicron\nu\pi\alpha\nu\tau\alpha\chi\omicron\nu\epsilon\iota\delta\omicron\varsigma$ , the same character universally」というものを想定する考え方である。

注5 なお、『メノーン』でいう「正しいおもわく」と、プラトーンの他の対話編でつかわれる「おもわく」とは注意して読み取っていく必要がある。とくに、イデア論を明確に主張する『国家—正義について—、ΠΟΛΙΤΕΙΑ—Η ΠΕΡΙ ΔΙΚΑΙΟΤ, ΠΟΛΙΤΙΚΟΣ』では、「くおもわく (ドクサ, opinion) >は、く知 (γνωσις, gnosis, knowledge) >とくらべれば暗く、く無知 (αγνοια, agnoia, ignorance) >とくらべれば明るいものだ」というように(「無知」との対応で「知識エピステーメー, science」\*も使われている)、高い者として「愛知者 (哲学者)」( $\phi\iota\lambda\omicron\sigma\omicron\phi\omicron\varsigma$  ピロソポス, philosophers) を、下位の者として「思わく愛好者」( $\phi\iota\lambda\omicron\delta\omicron\varsigma\omicron\varsigma$  ピロドクソス, doxophilist) をとらえている。本文中で引用した“道”の例えは、『国家』にもあるが(506C)、その趣旨は『メノーン』とは逆のようである。同じように、『国家』を書き上げてからの作とされる『パイドロス』においても、ドクサをもって、「真実在 (ουρα, reality) の観照によって浄められないままに、そこを立ち去って行く」者たちが自らを養う「糧」( $\tau\rho\phi\eta$ ) となるもの、と述べられている。また、『国家』の第六巻、第七巻においては、精神のうちに起こる■つの状態ということで、「知性的思惟 (νοησις, noesis, intellection or reason, (επιστημηに対応しては science))」「直接知」、「悟性的思考 (δειανοια, dia-noia, understanding)」「間接知」、「確信 (πιστις, pistis, belief)」「直接的知覚」、「影像知覚 (εικασια, eikasias, conjecture or picture-thought)」「間接的知覚」が示されるが、そのうちの前二者を「知性 (νοησις, noesis, intellection) 」とも呼び、後二者を「思わく (δωσια, doxias, opinion) 」とも呼んでいる。

\*『国家』においては、 $\epsilon\pi\sigma\tau\eta\mu\eta$  は「知識」と訳されているが(藤沢訳)、英語訳では、knowledge, wisdom, scienceなどが充てられている (scienceには、古期には「知識」「専門的知識」「学問」という意味がある)。

## 「知」と「正しい思わく」との関連について

ではプラトーンは、『メノーン』においては、「知」と「正しい思わく」との関連性をどう考えているだろうか。このことについてプラトーンが言及している部分を、三ヶ所確認してみよう。

①人には「正しい思わく」が内在していて、それが質問によってよびさまされ「知識」になる。  
②「正しい思わく」をもっているとは、「知ってはいないが思うところが真実 ( $\alpha\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha$ , truth) をついているというその状態」のこと。  
③「正しい思わく」が「原因(根拠)の思考によって ( $\alpha\iota\tau\epsilon\alpha\varsigma\lambda\epsilon\gamma\epsilon\sigma\mu\omega$  《注1》, with causal reasoning) によって」「縛りつけられると、それまで思わくだったものは、まず第一に知識となり、さらには、永続的なもの ( $\mu\omicron\nu\epsilon\mu\omicron\varsigma$ , abiding) となる。」

このようなことばから、プラトーンが「正しい思わく」と「知」との関連性をどのように考えているかを整理すると、次のようになるだろう。プラトーンはまず、「正しい思わく」を、人間に内在している ( $\epsilon\nu\epsilon\epsilon\mu\epsilon\iota$ ) のものとして第一義的にみている。同時にプラトーンは、「正しい思わく」が永続性をもつものとしての「知(識)」に転化する関連を論じている。しかしプラトーンは、「正しいおもわく」と「知識」とは別物であることを強調している。両者ともに生得的ではないが、「知(識)」は教えられ、「正しいおもわく」は教えられない、のである。「正しい思わく」をよびさまし、それにもとづいて知を形成していく過程、これをプラトーンは「想起  $\alpha\nu\alpha\mu\nu\eta\sigma\iota\varsigma$  アナムネーシス」と呼ぶ。「想起」されるということは、つまり、もろもろの事物に関する「真実」 ( $\alpha\lambda\eta\theta\epsilon\iota\alpha$ , truth) は人間に内在しているということになる。

このような『メノーン』のもつ内容を、さらに解釈していくならば、「知(識)」は、永続的であるという長所と固定化している(頼り)という短所とをもち、「正しい思わく」は、人間の魂の中からすぐに“逃げ出してしまう”という短所と、しかし新しい(未知の)実践的試練に向かう総合的な判断を可能にするという長所とをもち、ということになる。

さて、徳とは何かについて、『メノーン』では結局明示されていない。しかし私の『メノーン』理解では、徳とは、「正しいおもわく」の内容に本質的に関わるようであり、また徳の形成は、「正しい思わく」の形成の(生得的ではなく、また教えられないという)“秘密”に関わるようである。「知性」との関連でいえば、「すくなくとも、誰か政治的能力のある人物たちのなかに、ほかの者にもその能力をさずけることのできるような人が出てくるのでないかぎりは」という留保のもとに、徳が人間にそなわるのは、それは知性とは無関係にである、と推論されている。

徳とは何か(その本質は何で、どのように形成されるものか)は、確かに『メノーン』では明示されていない。しかし、プラトーンの諸対話篇についての私の理解では、プラトーンはソクラテースをこそ有徳の人と見ているのであろう(注2)。そしてプラトーンは、そのソクラテースとの会話によって(間接的であるものも含めて)自らが根底的に人間として覚醒していったという経験に、徳の形成の経緯(意味)を見ようとしていると思われる。『メノーン』の、徳というものは「神の恵みによってそなわる」という結論のことばからは、探求を回避(先送り)したような響きを感じるかもしれない。しかし徳というものには、煎じ詰めたところにはそう呼ぶしかないような決定的な濃縮な瞬間(内的・能動的経験)があるということの含みを、プラトーンはつよく意識しているように思われる。

さて、“徳とは何か”を問うということは、『国家』『パイドロス』(注3)などとのつながりで考

えるとすれば、それは「魂」(ψυχήプシユケー)の「本性」(φύσιςピユシス)の探究そのもの、ということになるだろう。

注1 λογισμός(ロギスモス)は“推論”“推理の力”という意味。

注2 プラトンのペリクレースに対する評価には、格別のものがある(『パイドロス』参照～第六節の注1に関連する)。

注3 先行する諸研究によれば、プラトンの執筆は『メノン』『国家』『パイドロス』という順番でなされた、と想定してよいだろう。

#### 四 「知」と「正しい思わく」に関わる二、三の考察

以上のような、『メノン』を中心とする「徳」の考察から、二、三のことを検討しておこう。

一つは、プラトンのソピステース(ソフィスト)批判についてである。プラトンは『メノン』において、ソピステースを次のように厳しく批判している。

医者や靴作りの職人などと異なり、徳の師たるソピステースは「自分にゆだねられたものに対して為になること」をせず、「逆に、だめにしてしまう」のであり、「しかもそれに対して、公然と謝金の支払いを要求する」のである。ところが徳の教育については、ことの真相が判然としないものだから、たとえばソピステースの一人プロータゴラス(Πρωταγόρας)は「自分と交わる者たちを墮落させ、引き受けたときよりも悪い人間にして返すということを四〇年以上もつづけながら、全ギリシアがそれに気づかなかった」のだ。こういうことは一人プロータゴラスだけではなく「まだまだほかにも、彼より先の時代に生きた者や、現在まだ生きている者で、そういう人たちがずいぶんたくさんいるのだよ。」

このようなプラトンのソピステース批判は、私には、青年(子ども)の魂＝「魂(ψυχή)の教養(παιδείσις)」(『パイドロス』)をダメにするような、現代の「教育」のありようを批判する根本的見地であるように思えてくる。現代の教育は(あるいは自己教育も)、この批判の見地(ひょっとすると子どもたちの、あるいは自分自身の魂をダメにしているのかも知れないという自覚、つまり教育とは一人ひとりの人間のどういう資質を育むいとなみであるのかという深い問い)を自他の内部に保持していかなければならないのだと思う(ソークラテース以降の思想家たちは、その思想の核心部において、このことを反省しつづけてきたのだと思う)。

同時にソークラテースのソピステース批判は、青年の魂をダメにするという結果を引き起こすことによって検証されるような質の、「学問」批判でもあるように思える。つまり、学問と教育とが本質的に脈絡をもつものであるということ、否定的に示しているのである。教養教育という思想は、専門諸科学と(社会)教育との内的関係を見出す本質的テーマなのだと判断してよいだろう。(この主題に直結する、プラトンの『ソピステースΣΟΦΙΣΤΗΣ,THE SOPHIST』や『プロータゴラスΠΡΟΤΑΓΟΡΑΣ,PROTAGORAS』に関する研究は機会を改めたい。)

検討しておきたい第二の点であるが、プラトンは『メノン』において、具体的に、徳の重要な内容として「正義δίκη,justice」と「節制σωφροσύνη,temperance」とを問うている。(注1)この二つの徳の理解は、魂の(人間の)本質として、自己に内在する(内的)正義＝自己の統括力というべきものがある、という考え方に拠っている。つま

りプラトーンは、自分自身を支配する ( $\alpha\rho\chi\omega$ , control) ことを自由である ( $\epsilon\lambda\epsilon\nu\theta\epsilon\rho\omicron\varsigma$ , liberty 《注2》) ととらえている。重ねて言えば、プラトーンは“魂の王国”のこととして正義をとらえているのである。【国家】では、徳とは「魂の健康 ( $\nu\gamma\iota\epsilon\iota\alpha$ )」のことであり、つまりは正義をつくりだす魂の状態 (魂の美しさ  $\kappa\alpha\lambda\lambda\omicron\varsigma$  や壮健さ  $\epsilon\nu\epsilon\xi\iota\alpha$ ) のこと、と論じられている。

正義と自制は、同質の人間の資質である。例えば“自制を失う”ということは、自ら (の正義) を失う=己の激情、あるいは欲望や嫉妬、羨望、猜疑、欲情、等々に敗北する (支配される=隷属する)、ということの意味する。こういう意味において、「節制」と訳されている  $\sigma\omega\phi\rho\omicron\sigma\nu\nu\eta$  (ソープロスネー) は、「自制」という訳の方が適切である場合もある。(注3) このディケーとソープロスネーは、どの時代においても、根底において人間に由来する「文化」の状況、そして「社会・政治」の状況、したがって「歴史」の性格、を見極めていく本質的眼目となろう (注4)。私は、力=暴力に訴える戦争というものは、この自制を失っていることに本質があると考えており、したがって、「正義」の名のもとに戦争を仕掛けるということは、根源的な矛盾であって、正義というものの原義を損なう使用方法だと思っている。正義とは、内省の原理であり、資質のことであろう。(注5) なおプラトーンは、【国家】において戦争 ( $\pi\omicron\lambda\epsilon\mu\omicron\varsigma$ ) の起源について言及しており、また【パイドーン】では、「戦争も、内乱も、争いも、もとをただせば結局みな、ほかならぬこの肉体とその欲望がひき起こすものではないか。なぜなら、およそすべての戦争は財貨の獲得のために起こるのだが、われわれが財貨を獲得しなければならぬのは肉体のためであり、奴隷のように肉体にかしずかねばならぬためなのだから。」と語り、真実を探究することと同義である「閑暇  $\sigma\chi\omicron\lambda\eta$ , leisure」の本質性について述べている。(注6)

私は、正義について、プラトーンの層想に拠りながら次のように考えている。本来一人ひとりの内的なもの (魂のこと) としての正義は、教育・文化によって覚醒させられ、日常の生活あるいは社会的・政治的なるものにおける修練によって自己の資質=性格 (内的正義) を形成していくものとなる。そして、そのように意識して形成されていく自己の (内的) 正義が、社会的・政治的事実に分別を与え、それぞれに自己の行動を選ばせていくのだと。(注7) そして私は、この後天的な ( $\epsilon\pi\iota\kappa\tau\eta\tau\omicron\varsigma$  acquired) 分別 ( $\delta\bullet\xi\alpha$  opinion) という資質の自覚的形成 (注8) —これはまさに生涯にわたる人生の課題—こそ、自己教育 (教育の基底は自己教育) の核心点になるのだと考える。

【メノン】を中心に注目しておきたい第三の点は、プラトーンが「本質」=「理念」( $\epsilon\iota\delta\omicron\varsigma$  エイダス) を問うているということである。メノンが徳というものについて、「男の徳」と「女の徳」とを区分して説明しようとするのに対し、ソークラテースは「徳は、子供の中にあると年寄りの中にあると、女の中にあると男の中にあると、徳であるという点に関して、何かすこしでも異なっているだろうか？」と対話をすすめていく。このように、ことからの本性を探究するということは、根底的に普遍性を考えることに連続しているのである。つまり、“俗論”(=とらわれた思考) をつきぬけた平等論を展開していく原動力をもつということであり、このことは現代社会においても変わらぬ意味をもつ。(注9)

注1 【国家】では、「智慧」があり ( $\sigma\omega\phi\omicron\varsigma$ , wise) 「勇気」があり ( $\alpha\nu\delta\rho\epsilon\iota\alpha$ , brave) 「節制」をたもち ( $\sigma\omega\phi\rho\omega\nu$ , sober) 「正義」をそなえている ( $\delta\iota\kappa\alpha\iota\alpha$ , just)、という四つの徳が示されている。

注2 プラトーンにおいては、「自由」の本来的な対立語は、「隷属  $\delta\sigma\upsilon\lambda\epsilon\iota\alpha$  ドワーレイア」である（「義務」ではない）。なお、ルソー（J.J.Rousseau）は、『エミール EMILE』において、「自由 *liberte, liberty*」と「力 *force, strength*」への準備のために、自分のからだを「自然の習性 *l'habitude naturelle, natural habit*」のままに（人為の習慣＝欲求を身につけないように）しておくこと、また「自分で自分を支配する *maitre de lui-meme, self-control*」こと、自分の「意志 *volonte, will*」をもつときがくればすべて意志をもって行なうこと、を主張している。プラトーンとルソーとの思想的関連については、第7節の（注3）で言及していることを含め、機会を改めて考察したい（日本語訳は今野一雄訳の岩波文庫版、英語訳は、Jean-Jacques Rousseau, EMILE, Translated by BARBARA FOXLEY, THE EVERYMAN LIBRARY, による）。

また、勝田守一が、教養を「子どもたちの祖先がつくり出した文化の基本的な構造を自己に同化することを通して、それを支配する能力」と規定しているが、その「支配する」という意味は、プラトーンの、魂を支配（ $\alpha\rho\chi\eta$ ）する、という思想—能動的な主体となる、つまり「自由」になる—と同じ脈絡で考えてよいだろう。

注3 藤沢令夫訳『プロタゴラス（プロータゴラス）』（岩波文庫）では、ソープロスネーを「分別（節制）」と訳している。

注4 私は、福沢諭吉の『文明論の概略』などの大きな思想というものは、そのことの探究に啓発され、精神の普遍性というものに自主的に向かっていった記録なのだと思う（北田耕也著『明治社会教育思想史研究』学文社、1999年、は、社会教育思想をそのように跡付けようとしたすぐれた先行研究である）。新渡戸稲造の『武士道、BUSHIDO-THE SOUL OF JAPAN』の、その本質としての教養論（世界思想というべきもの）、あるいは前田多門・神谷美恵子など新渡戸に関わる人の思想的つながりの意味、さらには名著『形相』（短歌集）をもつ南原繁の世界、また日本国憲法・教育基本法の思想の成り立ち、そういったものの内的関連（南原の憲法改正論議予告も含む）—それは、社会教育思想の核になるものとするが—については、機会を改めて論じよう。

なお先に注記した（第一節の注7）五十嵐顕氏にとっても、神谷や南原らの存在は小さいものではない。五十嵐氏は、直接的に次のように記してもいる。

私は神谷さんが前田美恵子として『雪よりも白く—石倉富美子の信仰生涯』（昭和十三年五月十一日印刷十〇日発行、非売品）を「編集発行」された時から尊敬し、その著書から教えられてきたのです。（五十嵐著『「わだつみのこえ」を聴く—戦争責任と人間の罪との間』青木書店、1996年）（第5節の注1に関連する）

注5 現代の世界政治においても、「正義」の名による戦争の正当化が試みられているが、しかし多くの人たちは、その「正義」論に、ある“空虚さ”を直感している。それは、「正義」が、本質的には身勝手な“利害”のこととして用いられていることが分かっているからである。「正義」というもののもつ普遍への洞察と、そのことに信を置くという表明とがなされていないからである。

注6 ユネスコの「学習権」宣言（THE RIGHT TO LEARN 1985年）にいう「平和に生きること」を学ぶ *learn to live in peace* という考え方は、教養思想としての含蓄を汲み取り、教育目的論として受け止めるべきだろう。また、日本国憲法前文で言われている平和思想、および教育基本法で言われている、「真理と平和を希求する人間の育成」（前文）、「人格の完成をめざ

し]「平和的な■家及び社会の形成者として」「真理と正義を愛し」(第1条:教育の目的)という人間についての思想は、プラトーン、アリストテレスの教養思想そのものを受け継ぐものとして、統一性あるものとして教育学的に読み取っていくべきだろう(第七節の注1、注3に関連する)。

注7 ドクサ(δοξα)は、一個の人間の能力としてみれば、「分別」「判断」などの意味になるが、社会的にみれば、「評価」「評判」という意味になる。対応する英語opinionも、一個の人間としてみれば「意見」「見解」という意味になり、社会的にみれば「一般の考え」「世論」という意味になる。この両者(一人の人間の能力と社会的機能ないし文化)には、プラトーンが一個人の正義を国家全体の正義との対比で論じたような(『■家』)深い関連性と、そして区別がある。なお、プラトーン思想と日本における唯物論哲学者である戸坂潤(1900~45)の教養論との、要諦における連続性については、機会を改めて論じよう。

注8 幼少期からの、分別の“自覚”に関わる養育・教育と自己教育のありようの探究は、文学的世界を含め発達論のテーマであり、まただれをもそこに回帰させていくほどの魅力をもつ。発達論と哲学との統合が意識されているように思えるM.ドベスの『教育の段階』は、自律への歩みを軸にして、その複雑で意味深い世界を再発見していく(大人が経験していく)ものとなっている。私は、子育て・教育というものの根底的眼目は、子ども(若い世代)の成長というものと先行する世代がそれに関わるということの面白さ・ゆたかさを発見・経験し味わっていくことにある、と考える。「教育」を研究する、あるいは教育学を学ぶとは、そういうゆたかさに気づいていく手がかりを得ていこうとすることなのだろう。なお、J.J.ルソーの『エミール』が偉大なのは、それが、人間についての思想を根底においた発達論になっているからだろう。ドベスもまた、すぐれた人間論をもつ発達論を展開しているが、発達論そのものにウェイトが置かれる分だけ、人間の思想を喚起させる力はルソーにおいて生き生きとしている。(第一節の注8に関連する)

注9 古代ギリシアのポリスが、奴隷制を含め、社会的不平等を保持して成立していたことは、改めて言うまでもないことである。それゆえに、「国家」というものの成り立ちを原理的に考察していくプラトーンの思考は、さまざまに革新的であった。同時に、プラトーンの思考には、(国家=ポリスの自律性と個人=人間の自律性との関係を単なる比喩を超えて相似的にとらえようとするに由来すると思われる)間違った認識への突き進みというべきものもある(『国家』第五巻の、妻女を共有する論、子どもづくりのことなど)。一原理的に思考していく世界=思想には、このような誤りをおかしていく余地(「思わく」には、誤る  $\alpha\mu\alpha\rho\tau\alpha\nu\omega$  可能性もあるということ)が、この本性としてあるのである。そういったことを考えさせるものとしても、プラトーンの思考は興味深い。しかしそうした誤り(誤って  $\eta\mu\epsilon\rho\tau\eta\mu\epsilon\nu\omega$  導くこと)を含みつつも、プラトーンの、男女の資質の普遍性や教育の共通性、共同性を根底的に論じる洞察世界からは、今日なお注意深く読み取るべきものがあると思う。例えばプラトーンは、「国家を守護するという任務に必要な自然的素質( $\phi\upsilon\sigma\iota\varsigma$ , nature) そのものは、女のそれも男のそれも同じであるということになる。ただ一方は比較的弱く、他方は比較的強いという違いがあるだけだ」とソクラテースに語らせている(『国家』)。

なお、古代ギリシアにおける奴隷(制)の問題についてであるが、プラトーンの思想から学ぶべきことは、奴隷的であるということが人間としての徳性を著しく制約する、という観

方であろう。これは、奴隷（制）に対する政治的解放の問題とは別次元のこととして普遍性をもつ。「奴隷」そのものについてのプラトーン（の考え方は、「夷狄」（β α ρ β α ρ ο ς, barbarian）との関係において、「ギリシア人を奴隷（δ ο υ λ ο ς, slave）として所有するということも、彼ら自身もしてはならないだけでなく、他のギリシア人たちにもそのように忠告しなければならない」、というものであった（古代ギリシアの奴隷制については、思想=精神と史実との両面からその実態を丁寧に見ていく必要があろう）。

## 五 『メノーン』の「想起 α ν α μ ν η σ ι ς アナムネーシス」説

『メノーン』におけるソクラテースの問題の立て方の基本は（『メノーン』の主題の基底は）、そもそも徳とは何かを探究せねばならない、というものである。しかしメノーンの、“知らないものをどうして探究できようか”という問いかけから、ソクラテースは、人間の魂は不死であって、魂はあらゆることをすでに学んでいるのだ、という説を展開していく。いわゆる「想起説（独語）Erinnerungslehre,（英語）doctrine of recollection」である。まことに興味深い説であって、古来さまざまに注目されてきたものであるが、改めて光りをあててみよう。まず、この説の中心的部分を確認しておこう。

「こうして、魂（ψ υ χ η, soul）は不死なるものであり、すでにくたびとなく生まれかわってきたものであるから、そして、この世のものたるとハデスの国のものたるとを問わず、いっさいのありとあらゆるものを見てきているのであるから、魂がすでに学んでしまっていないようなものは、何ひとつとしてないのである。だから徳についても、その他いろいろの事柄についても、いやしくも以前にも知っていたところのものである以上、魂がそれらのものを思い起こすこと（α ν α μ ν η σ θ η ν α ι, to recollect）ができるのは、何も不思議なことではない。なぜなら、事物の本性（φ υ σ ι ς, nature）というものは、すべて互いに親近なつながりをもっていて、しかも魂はあらゆるものをすでに学んでしまっているのだから、もし人が勇気を持ち、探求に倦むことがなければ、ある一つのことを思い起こしたこと（\*）—このことを人間たちは「学ぶ」（μ α θ η σ ι ς, learning）と呼んでいるわけだが—その想起がきっかけとなって、おのずから他のすべてのものを発見するということも、充分にありうるのだ。」

\* α ν α μ ν η σ ι ς (remember) が使われている。

だからソクラテース（プラトーン）は、つづけて「探求する（ε η τ ε ω, research）とか学ぶ（μ α ν θ α ν ω, learning）とかいうことは、じつは全体として、想起すること（α ν α μ ν η σ ι ς, recollection）にほかならない」と明言する。あるいは「教え（δ ι δ α χ η, teaching）というものはなく、想起（α ν α μ ν η σ ι ς, recollection）があるだけだ」とも語る。（注1）このあとソクラテースは、学識のない召使を登場させ、図形の証明の場面として想起説の裏づけを試みている。（注2）

注1 この「想起」（α ν α μ ν η σ ι ς）とは、「記憶」（μ ν η μ η μ ν ε - μ ε ρ）を「再び」（α ν α）よび起こすことである。

ところで、 $\mu\nu\eta\mu\sigma\upsilon\nu\eta$  (ムネーモシュネー) は記憶、回想、という意味であるが、ギリシア神話では、 $\text{M}\nu\eta\mu\sigma\upsilon\nu\eta$  (ムネーモシュネー) は記憶の女神であり、そのムネーモシュネーとゼウス ( $\text{Z}\epsilon\upsilon\varsigma$ ) との子どもが、 $\text{M}\omicron\upsilon\sigma\alpha$  (ムーサー複数) は  $\text{M}\omicron\upsilon\sigma\alpha\iota$  ムーサイ、英語の Muse ミューズ：学芸を司る女神) である。そして英語の museum ミュージアム (博物館・記念館) は、ギリシア語の  $\mu\omicron\upsilon\sigma\epsilon\iota\omicron\nu$  (ムーセイオン) “ミューズたちの神殿” に由来し、音楽・詩歌・学芸の座という意味をもつ。つまりミュージアムには、その淵源にこの「記憶」がひそんでいと着想させられる。この着想は、プラトーンの想起説そのものとよく符号すると考える。

ここからさらに考えるのであるが、ミュージアムのもつ思想について、私たちが思い起こすことを意識する場 (ものごとの諸関連というものを含め、物と自分自身とを発見していく場)、という考え方を着想し得るように思われる。こういうことから、たとえば現代の「美術館」一つにしても (いわゆる博物館や動物園はいうまでもなく)、そのありようについては、はるかに開拓されるべきものがあるように感じられてくる。さらには、(社会) 教育機関や施設の思想というものについて、ムーセイオンの思想から着想していくことが思われてくる。

そのことに関連して、私は環境生態学者である今泉吉晴氏 (都留文科大学教授) との会話をとおして改めてつよく意識したのであるが、柳宗悦が「顧ると私が物を求めるのは、そこに私の故郷を見出しているからではないか。…人間は実は誰にでも郷愁の念がある。徳を求めたり光を慕ったりするのは、本来の性に戻りたい心の現れだともいえよう。…美しさを人間が飽かず求めるのは、人間本来の故郷に帰りたい心に外なるまい。」と述べていることに注目したい (『蒐集の弁』1954年《\*》、柳著『民芸四十年』岩波文庫、1984年、所収)。柳の美についての思想は、想起説と非常によく符号している (第九節の注4に関連する)。教育学者としてこの柳に注目していたのは五十嵐氏であり (\*\*)、 「たしかに美は人をしてその魅力に沈潜させ、没歴史的な享受に人の心を憩わせてしまうけれども、柳の朝鮮芸術への探求には三・一独立運動にちなんだ彼の『公憤』のあったことを忘れることはゆるされない。」と述べ、さらに「柳と浅川 (浅川巧…引用者) との協同協力の努力は、特殊な狭い社会関係のなかで妥当する考えをこえて、芸術的感動の美、その内なる規範、そしてこれを生み出した民衆の力に人びとの心をめざめさせ、これによって人間侮蔑、民族差別を恥ずかしめるのである。」と評している (『侵略主義を批判した思想』、前出『くわだつみのこえ』を聴く一戦争責任と人間の罪との間―) 所収)。私は、雑誌『改造』 (大正9年6月) に発表されたという柳の『朝鮮の友に贈る書』 (上記『民芸四十年』所収) を、感動をもって読んだのであるが (そこには、プラトーンや孔子の名も出てくる)、柳の美の思想と侵略批判とは別物ではないのである。五十嵐氏が使っている「芸術的感動の美」「内なる規範」「民衆の力」「めざめさせ」「人間侮蔑」「民俗差別」ということば、あるいは五十嵐氏が引いた「公憤」ということば、これらは人間の原理の把握に触れているのである。五十嵐氏が歴史と格闘し問い詰めようとしていたことについて、私はある“親しみ”とあらたな尊敬の念を感じはじめている。(第四節の注4に関連する)

\* この文章の冒頭で、柳は、プラトーンの対話編、ソクラテースの『弁明』に言及している。

\*\* 北田耕也氏の、柳著『柳宗悦妙好人論集』 (岩波文庫) への注目は、別の文脈において

て本質的である（北田著『自己という課題—成人の発達と学習・文化活動—』学文社、1999年）。北田氏の仕事から学ぶことは、機会を改めて行なおうと思う。

私は、プラトーン、アリストテレス（*Ἀριστοτέλης* B.C.384～B.C.322）や柳らの思想から学びつつ、その思想を社会教育・博物館原論として位置づけ、人間を想起するという思想を豊かに問い直すということをささやかに試みていこうと思う。

注2 想起説については、『パイドーン』*αὐτὸν* では、ソクラテースのかねてからの主張として「われわれがものを学ぶということは、じつは想起にほかならないのだ」（藤沢令夫訳『プラトーン』筑摩書房、1959年）と同趣旨で論じられている。

## 六 「想起説」の本質としての〈探究意欲〉と〈自分自身〉について

上述のようなプラトーンの考え方=想起説は、私たちの常識からすると奇異に感じられる。それにもかかわらず、プラトーンが原理的に把握していこうと格闘した足跡（想起説）には、私たちにさまざまな基本的な思考をうながすものがある。（注1）探究意欲というものも、その一つである。教育本質論として注目すべきことであるが、プラトーンは、“知らないものをどうして探究できようか”という議論について、そういう考え方は「われわれを怠惰にするだろうし、懦弱な人間の耳にこそ快くひびくもの」であり、それに対し想起説は、「仕事と探求への意欲を鼓舞するもの（*ἐπιτηδεύειν* = 探求しようとする, *inquiring*）」と述べている。同じことを、プラトーンは下記のようにも繰り返している。

「ひとが何かを知らない場合に、それを探求し（*ἐπιτηδεύειν*, *inquire*）なければならないと思うほうが、知らないものは発見する（*εὐρίσκω*, *discover*）こともできなければ、探求すべきでもないと思うよりも、われわれはすぐれた者になり、より勇気づけられて、なまげどころが少なくなるだろうということ、この点については、もしぼくにできるなら、言葉のうえでも実際のうえでも（*καὶ λόγῳ καὶ ἐργῳ*, *both in word and deed*）、大いに強硬に主張したいのだ。」

このような、探究心というものを人間観に関わってふかく支持する見地は、プラトーンの諸対話篇に一貫しているが、それは、ソクラテース・プラトーン思想全体がもっているもっともゆたかな本質というべきものであり、哲学的問答法の生命になっているというべきものだろう。（注2）

ところで、プラトーンの探究意欲ということの意味をしっかりと考えるために、『メノン』の次のようなことばに注目してみよう。

「この子（召使…引用者）は、自分の無知をさとって行きづまりにおちいり、それによって知りたいと思う気持になる以前に、知らないのに知っていると思ひこんでいた事柄を、探求したり学んだりしようと試みるだろうか？」

無知の自覚、これが探究意欲の源なのだということ。その場合、想起説として留意しておきたいことは、その子（召使）自身の思わく（思うこと、考え、判断）に拠るのであって、教えや説明に拠るのではない、という点である。同じことを、プラトーンは次のようにも言っている。

「誰かがこの子に教え（*διδάσκει* *teach*）たからというわけではなく、ただ質問した結果として、この子は自分で（*αὐτὸς* 自ら進んで）自分の中から（*ἐξ αὐτοῦ*, *out of*

himself) 知識 (επιστημη, knowledge) をふたたび取り出し、それによって知識をもつようになるのではないかね?」「自分で自分の中に (αυτον εν αυτω, in himself and by himself) 知識をふたたび把握し直す (αναλαμβανω, recovery) ということは、想起するというにほかならないのではないだろうか?」

このように、想起説における探究意欲というものは、単なる無知の自覚ではなく、自分自身に拠る (プラトーンのことばとしては、「正しい思わくがこの子の中に内在していて (ενεσουτα αι αυτω αληθειαι δοξει, he has had true opinions in him) )」ということにその核心がある。こう考えてくると、私たちが例えば生活綴り方の思想として「概念くだけき」ということに注目するけれども、その経緯とエッセンスというものを、想起説から光りをあてる可能性が思われてくる。「概念くだけき」とは、つまり、自分が知らないということに逢着し、自分の良い思わくというものを意識し、自分の良い思わくに依拠して真実性のあるもの=本質を見出していく、ということなのではないだろうか。(注3)さらには、(社会)教育・(生涯)学習において言われる「相互学習」というものの真意についても考えさせられるのであるが、それは学習の単なる形式的な方法のことではなく、一人ひとりが自分に拠って発見していくという原理を含んでいるのであろう。そしてまた、発見される(べき)真実さに対しては、お互いにみな平等である(上下はない)という見地を含意しているのであろう。想起説は、“一人ひとりの内部にその人の正しい思わくがあって、それを呼び覚ますのだ”という(教育の)思想であって、通俗的な教え込みの発想とは、文字通り原理的に異なっているのである。

繰り返すけれども、想起説の生命は、狭義の認識過程にあるというよりは、一人ひとりの探究心というものの所在を明らかにし、それを擁護していく、ということにあるのではないだろうか。(注4) こういうところから私たちは、教育の本質は、固有名詞をもつ<その人・子>(≠人一般・子ども一般)の探求心を喚起させることにあり、という着想を得ることができる。問答法あるいは会話の意味は、その喚起の方法=その子の探求心を呼び起こすということ、に本質があるのだろう。つまり、<その子>のもっているもの(もちあわせているもの)に根拠をみる、ということなのだ。(注5) 新教育運動などさまざまな教育思潮において繰り返し言われる、“学習主体を重視する”とは、そういうことなのだろう。

さらにはこういうこともつよく意識されてくる。私たちが経験を重視するというけれども、それは、<その人(子)>の経験を重視するということであり、教授過程として学び取らせるものを設定してしまった“抽象化された経験”に対比されるところに本質があるのだろう。(注6)

ところで、想起説が<自分>に依拠する(内在している=ενεμει)という見地を根源にもつという場合、その<自分>が認識過程においてもつ意味は、いわゆる主観主義ではない。『メノーン』においては、イデア論はまだ提示されていないけれども、認識されるべき世界は<自分>の奥底に経験されたものとして、<自分>の向こうに在る(想起されるべきものとして在る)、と構想されている。(注7) その想起されるべき世界は、非常に豊潤なものと解すべきだろう。(注8) なお、プラトーンにとって想起説は、『国家』、『パイドロス』においては、確信に満ちたものとなっている。(注9)

注1 プラトーンの次のようなことばは、私には、プラトーンの、自身の探究についての自覚を表明しているもののように思われる。

彼は、「およそ技術のなかでも重要であるほどのものは、ものの本性についての、空論にちかひまでの詳細な論議と、現実遊離と言われるくらいの高邁な思索とを、とくに必要とする。」と述べ、続いて（第一節で触れた）ペリクレスについて、「そういう技術の特色をなすあの高邁な精神と、あらゆる面において目的をなしとげずにはおかぬ力との源泉は、何かそういったところにあるように思われるからだ。ペリクレスもまた、そのすぐれた天分に加えて、この精神、この力をわがものとしたのであった。」と評し、さらに、そのような資質の形成は、「彼が、同じこの精神と力量の所有者であるアナクサゴラス（*Ἀναξάγορας*）に出あったおかげであろう。」と述べている（『パイドロス』）。

これらのことばは、プラトーンが考える「徳」の意味についてヒントを与えてくれ、またその育成ということにかかわる重要事について示唆を与えてくれてもいる。とくに、宇宙創生論につながる思考については、機会を改めて論及したい。

なおプラトーンは、『パイドーン』において、アナクサゴラスへの期待と失望とをソクラテースに語らせている。アナクサゴラスの思想については、廣川洋一著『ソクラテス以前の哲学者』（講談社学術文庫、1997年）によって伺うことができる。

注2 プラトーンは『パイドロス』において、大いなる労苦を要する「大きな目的をめざす *μεγαλὸν ἐνεκα* for great ends」ということを言っているが、その目的は人事を超えたところ＝イデアの探究（「神々のみこころ」）にあるべきだ、と述べている。

注3 「概念くだき」については、日本作文の会編『生活綴方事典』明治図書、1958年、において、その使われ方の経緯や意味についてコンパクトに記されており、参考になる。ここでは、「概念くだき」のエッセンスに関わる一部分を引用しておく。

「…その現実の直視によってえた自己の問題意識を大切にし、それを成長させ、それを解決したい欲求をたかぶらせ、そのためには、他から与えられるどのような偏見にも耳をかさず、自分の目で見たものを土台として、自分の頭で考え、自分および自分の仲間の気持と、自分の判断で自主的に行動をしようとするような強い意志をもった子どもに育てたい。ありきたりの概念や偏見に引きずられて、ものごとをやっていくのではなく、自分の自主的な考えでつくり上げた、いきいきとした概念や、自分が、自分の目で見、耳で聞いたものに照らして、これは真理だと確信して行動するような社会的人間の方向に、子どもを育てたい。…」

注4 このことは、『国家』においても遺憾なく発揮されている。たとえば、第一巻の349Aで示された、ソクラテースのトラシュマコス（*Θρασύμαχος*）に対する姿勢。

注5 文学者大江健三郎氏の近著『「自分の木」の下で』（毎日新聞社、2001年）についてであるが、その最初から想起説を思わせるものがある。そして、私は驚き、また納得もしたのであるが、著書のなかの「私の勉強のやり方」という文章には、『メノーン』そのものが紹介されている。この大江氏の著書の書名そのものに想起説の思想が暗示されているが、私は、大江氏はプラトーン（ギリシア思想）を生きているのだと思うようになっていく。大江文学の味わいについては、教育思想そのものの開拓なのだという趣旨において、機会をあらためて論じてみよう。ここでは、*μνημηνή*（ムネーメー）が「記憶」「記念」「記録」という意味をもち、*ἀνάμνησις*（アナムネーシス）が「想起」「思い出」「記念のための犠牲」という意味をもつことを記しておく。

なお、大江氏の世界から学ぶということについては、拙論「子どもと大人の会話の世界を

耕す」(島田修一編『生涯学習のあらたな地平』国土社、1996年、所収)でも試みている。

注6 そのような、〈自分の経験〉を交感しあうものとしての「会話」を、教育実践の眼目として文字通り実践的に探究した成果として、羽田香代子氏の『学校における子どもの会話の採録とその考察—教育実践と会話の採録を重ねることによってひらかれる可能性について』(私家版、都留文科大学大学院修士論文2001年度)がある。山梨県富士吉田市の小学校四年生のクラスを対象としたこの実践的研究は、大田堯氏の“ロハ台の実践”(大田編『農村のサークル活動』農村漁村文化協会、1956年)の現代的よみがえりというべきものである。この実践的研究については、現代の教育実践にしっかりとした方向を示唆するものとして、機会を改めて光をあててみようと思う(第9節の注15に関連する)。

注7 『パイドロス—美について—』でいう「真の意味においてくある」ところの存在」＝「実有  $\sigma\iota\alpha$  ウーシア」という考え方を想定すればよいだろう。ただし、イデア論の現れ方において、『メノーン』は、プラトンの対話編のなかでは「前期」のものに属し、『パイドロス』など「中期」の作品とは区切られるとされる(『メノーン』の藤沢氏の「解説(後記)」では、「持つ  $\epsilon\chi\epsilon\iota\nu$ 」などと「分有する  $\mu\epsilon\tau\epsilon\chi\epsilon\iota\nu$ 」などとの使われ方の違いで明確に区切られるとされる)。なお、R.S.ブラック著『プラトン入門』(内山勝利訳、岩波文庫、1992年)では、『メノーン』を「初期」に位置づけており、またコーンフォード著『ソクラテス以前以後—ギリシア哲学小史』(大川瑞穂訳、以文社、1972年)では、「中期」に位置づけている。

注8 いわゆる「科学」というものをこの想起説にもとづいて考えてみると、(個別諸)科学は、想起のための一つの方法、という意味をもつのではないか。非常に有力な方法ではあるが、しかしなお想起のための方法の一つでしかないだろう。想起のための方法は、哲学的問答方、あるいは文芸・表現活動、個性的な観察方やその記録(内省)など、広く考えられるべきだろう。

なお、想起説を念頭において「遺伝子(情報)」に関する科学・技術の進捗を考えると、その「遺伝子(情報)」というのものもつ奥深さを直感せざるを得ない。

注9 『パイドロス』では、「想起」に関わって、(注8)でいう「方法」を越える「狂気  $\mu\alpha\nu\epsilon\iota\alpha$  madness」を問うている。「狂気」とは、私の理解では、真実の美を直視し愛する精神の状態、のことだろう。これは、私たち人間が真に試されつづけることの核心点になることであり、また、真に自律した精神(人格)がしばしば社会的に排斥させられること(世俗的常識・偏見を突き抜けることの一したがって真の批判者たり得ることの一そしてやがてひろく支持されていくこと)、本当の理由となるものである。(第9節の注8に関連する)

## 七 Erinnerung (エアイネルング) をめぐって

### —ヴァイツゼッカー大統領演説の思想—

リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー大統領が、ドイツの敗戦四〇周年を記念して連邦議会で行なった演説(1985年5月)は、世界の人びとに感銘を与えたものとして知られている。その全体は、永井清彦氏のすばらしい訳と解説によって知ることができる(「荒れ野の40年—ヴァイツゼッカー大統領演説 全文—」岩波ブックレットNo55、1986年、以下で引用する大統領演説の日本語訳

は、この永井訳による)。

この演説については、日本の社会では、例えば「(ヴァイツゼッカー演説が) 具体的な罪責を一つ一つ挙げていること、相手国の要求に押された結果ではなく、自発的に謝罪していること」(「朝日新聞」1990・5・13) に注目するというように、日本の、とくに政治責任者の、加害責任に対する姿勢のありようを批判的にとらえる文脈において引かれることが多いようである。

しかし演説で、「罪といい無実といい、集団的ではなく個人的なものであります (nicht kollektiv, sondern persönlich)」、あるいは「全員が過去からの帰結に関わり合っており、過去に対する責任を負わされているのであります」と語られているように、この演説は、ドイツ国民一人ひとりの内面に呼びかけるというところに、その特質がある。つまり、諸個人の精神＝正義 der Gerechtigkeit (つまり、魂の本性) を、したがって「人間」の背負うべき課題 (人間としての力 die menschliche Kraft) の試練を、問うたのである。それは、一人ひとりの「平和への能力 die Fähigkeit zum Frieden」を育てるという課題でもある。(注1) したがって、演説で引かれている下記のようなドイツ「基本法 Grundgesetz」の第一条第二項は、格別に意味深く響いてくる。

ドイツ国民は、それゆえに、世界における各人間共同社会・平和および正義の基礎として、不可侵の、かつ、譲渡しえない人権をみとめる (Das Deutsch Volk bekennt sich darum zu unverletzlichen und unveräußerlichen Menschenrechten als Grundlage jeder menschlichen Gemeinschaft, des Friedens und der Gerechtigkeit in der Welt.)

ドイツ国民は、自らそのように「みとめる」(bekennen sich 自ら認める・表明する)、と述べているのである。あるいは、ドイツ国民自らが自らの課題を表明しているといってもよい。そして、そのように自己表明することによって、世界の人びとの心に呼びかけてもいるのである。

演説の最後は、「自由を尊重しよう。平和のために尽力しよう。法を遵守しよう。正義については内面の規範に従おう (Dienen wir unseren inneren Maßstäben der Gerechtigkeit.)」という呼びかけで閉じられているのである。

ところで、この演説で重要な意味をもっているのが die Erinnerung (あるいは動詞形 erinnern) であり、訳者はこの語を、「心に刻む erinnern」という訳で統一している。翻訳に際し、この語の「inner (内面の)」というニュアンスを重視した、と訳者は注記している。しかし私には、「心に刻む」という訳語からは、「外在するものを内部に取り込む」という印象が湧く。私は、むしろ「心の内部から」という意味 (意識はしていないが、すでに心の内部に在るということ) を強調した方がよいと思う。つまり「想起」という意味 (= 思想) を生かすべきであり、私は die Erinnerung に、たとえば「想起すること」という訳を (その語がキーマムであることを強調するならば、「心に想い起こす」という訳を) 考える。

die Erinnerung の英訳としては、ラテン語の memoria (記憶) につながる recollection, memory, remembrance などが使われるが、そのなかでも die Erinnerung—recollection—α ν α μ ν η σ ι ς —「想起」(注2) という脈絡は、思想的なものだと考える。西欧の教養人であるヴァイツゼッカー大統領が、演説のなかで、このことばを特別なものとして選んだのには相応の意味があるだろう。事実、演説では、「記憶 das Gedächtnis」と「erinnern」とが対応するように使われてもいる。とくに、「心に刻む」というのは、歴史における神のみ業を目のあたりに経験することであり、(Die Erinnerung ist die Erfahrung vom Wirken Gottes in der Geschichte.) という下りは、演説の思想に

触れるものとして格別の注意がいるだろう。私は、ここで使われているdie Erinnerungは「心に刻む」ではなく、「想起」＝「(心に) 思い起こす」でなければならないと思う。思い起こされるべきことは、第二次大戦のことに限られないのである。

大統領は、演説の最終部において、次のように全体を締め括っていくのである。

「人間は何をしかねないのか—これをわれわれは自らの歴史から学びます。(Wir lernen aus unserer eigenen Geschichte, wozu der Mensch fähig ist.)」「でありますから、われわれは今や別種の、よりよい人間になったなどと思いがってはなりません。(Deshalb dürfen wir uns nicht einbilden, wir seien nun als Menschen anders und besser geworden.)」

「道徳に究極の完成はありません (Es gibt keine endgültig errungene moralische Vollkommenheit) —いかなる人間にとっても、また、いかなる土地においてもそうであります。」

「人間は何をしかねないのか」(fähigは能力・素質をもつ、という意味)という問いの眼、これは古代ギリシア思想そのものであり、モンテーニュ (Montaigne 1533~92) 等思想家たちが引き継いだ思想でもある。演説が見抜いているように、人間の本性は変わらないのである。大統領演説は、第二次大戦においてドイツ国民がなしたことを、単なる結果においてでなく、人間の本性の洞察につないで反省しようと呼びかけているのである。そこに希望があり、若い人たちと共にすべきものがある、と述べているのである。(注3)

注1 演説のこの趣旨は、さらに、私たち一人ひとりの「生き方」や「生活の仕方」、「心の態度」(『戦史』の訳者による注記)「習慣 εξέσις habit\*」というものの意識的な変化(それを私たちは、文化の深まりと考える)という実践的課題を意味すると受け止めるべきだろう(四節の注6と関連する)。

\* この「習慣ヘクシス」は、「状態」「姿勢」「態度」「品行」という意味をもつ。

注2 LIDDEL AND SCOTTの『GREEK-ENGLISH LEXICON』Oxford, AT THE CLARENDON PRESS, Impression of 2001, First edition 1889,では、α ν α μ υ η σ ι σの対応訳として、Plato等の使い方として、a calling to mindとrecollectionとを示している。“心(の内)に呼び起こす”という思想をとらえた英語訳である。なお、英語のto take(lay) to heart(心に留める、銘記する)、reflect on(熟考する)、ドイツ語のsich et.hinters Ohr schreibenに対応するギリシア語として、ε ν θ υ μ ε μ η σ ι (心に留める、肝に銘じる、熟慮する)がある。

注3 ヴァイツゼッカー大統領の思想がキリスト教信仰と結びついていることは、演説内容そのものがよく示している。ところで彼は、世紀末の変革のときにあつて「共通する素性の源泉を自覚」することが大切だとし、政治・経済的分析を試みながら、改めてヨーロッパ共通の「宗教的・哲学的源泉」というものに光を当てている。そこでは、ルソー (J.J.Rousseau 1712~78) を介在させつつ、古代的精神(直接的にはホメロス Ο μ η ρ ο σ、プラトーン)とキリスト教精神との関連が論じられている。いわゆる「多様性のなかの統一性」という考え方の骨格になる論議でもある(『変革期のヨーロッパの『徳』』、1990年、永井清彦編訳『ヴァイツゼッカー大統領演説集』岩波書店、1995年、所収)。実は、そこに示されたヴァイツゼッカー大統領の古典の読み取り方に、私は、ある“弱さ”(突き抜けていないもの)を感じている。

しかし私は、“戦争”を、人間の本性の洞察に結んで振り返るという見地（＝教養論）こそは、私たち（日本社会において）も共有すべき主題なのだと考える。そのための手がかりはさまざまに予想されるのだが、憲法・教育基本法の理念・思想の脈絡を注意深く問う（人間についての思想を問う）作業は（\*）、まさにそのことの実践的要諦に該当するものと思う（四節の注6に関連する）。

\* ここでは、憲法・教育基本法がもつ普遍的理念を探究する＝継承する、という意味で書いているが、私は、象徴天皇制については、廃止すべきであるという考え方をもっている。「天皇」という世襲的存在を公的に認め、学校において教育するということの教育学的検討はあまりなされていないように思うが、私は、この問題はとりわけ成長しようとする若い精神を深いところで曇らせるものになっていると考えている。（第一節の注5に関連する）

なおヴァイツゼッカー大統領は、ナショナリズムとは異なるものとして「愛国心 der Patriotismus」(patriotism パトリオティズム, πατριωτισμός)を論じている。このギリシア語の πατρις (祖国、故郷), πατριωτης (同胞)を語源にもつパトリオティズムに関しては、機会を改めて論じてみたい。

## 八 人間の本性についての洞察—批判精神の所在—

ところで、ヴァイツゼッカー大統領演説の精神は、私は、冒頭で触れた紀元前の歴史家トゥーキュディデースの『戦史』（『歴史』）に、すでに示されていると思う。（注1）

『戦史』は、27年間にわたるペロポネソス戦争を記そうとしたものであるが、その、「歴史」を詳細に記録していこうとする行為は、トゥーキュディデースの、人間と社会とを洞察していく営為そのものであったと言ってよい。

さてトゥーキュディデースは、ペロポネソス戦争の経過で起きたケルキューラの内乱について、つぎのように記している。

「…このようにして内乱は残虐の度を増しつつ荒れ狂った。しかもこの事件は最初の実例であっただけに人々に一そう強烈な印象を与えた。その後になると、処々の都市においてもアテーナイ勢の加勢を導入しようとする民衆派領袖と、ラケダイモン勢（スパルタ勢…引用者）を入れようとする貴族派の紛争が生じ、そのために極言すれば全ギリシア世界が動乱の渦中に陥ったからである。平和でさえあれば、これらの外部勢力の干渉を仰ぐ理由も意志もない各派指導者も、戦時となってからは、いずれかの陣営との同盟関係が生じ、国内反対派の弾圧とそれによる自派の勢力増大を求めて政治的均衡を崩そうと望む者たちにとっては、外国勢力の導入が簡単にはかられるようになった。内乱を契機として諸都市を襲った種々の災厄は数知れなかった。」

つづいてトゥーキュディデースは、「この時生じたごとき実例は、人間の性情が変わらない限り、…、未来の歴史にも繰返されるであろう。」と述べているのである。この、「人間の性情（φύσις αὐθροπῶν, human nature）が変わらない限り」、という言葉は、“人間の本性は変わらないものである以上、未来にも悲惨な事態は繰返されていくであろう”という意味にも、“歴史

は人間に、自らの本性を変えていかなければならないという実践的課題を課している” という意味あいにも取れる。しかし少なくとも『戦史』を読む限り、トゥーキュディデースは、歴史というものをいささかも楽観的には見ていないと判断される。現実に人間が経験しつつあることについて、彼の精神はつぎのように洞察している。

「…一国において人間生活の秩序が根底から覆されてその極に達すると、それまでにはや法を度外視して罪悪をなすことになってしまった人間の本性 ( $\eta \alpha \nu \theta \rho \omega \pi \epsilon \iota \alpha \phi \upsilon \sigma \iota \varsigma$ , human nature) は、今や法 ( $\nu \omicron \mu \omicron \varsigma$ , the laws) そのものをすら支配する力をもち、このときとばかり激情の赴くままに正体を露呈し、正義を蹂躪し、己れよりすぐれているものを敵視する。嫉妬心がかくも破壊的な力を持っているものでなかったなら、人間が神よりも復讐を、正義よりも利慾をあがめる事態など生じえなかったに違いない。そして遂には、人間は神や正義などについての、敵味方共通の掟 ( $\nu \omicron \mu \omicron \varsigma$ , principles) を守っていれば、敗れた者にも救済の望みがなお残っているものを、相手を誅罰せんとはやるあまり、己れもいつかは神や正義に訴えねばならぬ危機に見舞われるかも知れぬことを忘れて、先に立ってそれらの規を打ち壊し跡形もなくしてかえり見ないのである。」

ヴァイツゼッカー大統領が、ドイツ国民がなしたことを詳細に振り返りながら、「人間が何をしかねないのか…われわれは今や別種の、よりよい人間になったなどと思いがってはなりません」と省察していることは、トゥーキュディデースが歴史を記録しつつ、「人間の性情が変わらない限り…」と洞察していることと、そのリアリティにおいて相呼応しているのである。(注2) 私たちの記憶はそういう歴史をもっている。想起すべきものの由来(記憶)は、歴史をはるかに遡るのである。トゥーキュディデースという精神とヴァイツゼッカーという精神は、それぞれに歴史と人間を凝視している。(注3)

さて、ペロポネネソス戦争のような歴史的経験と人間のありように対し、ソークラテース・プラトーンたちは徳性、正義の探究に向かったのであるが、それは「人間の本性」認識の、弁証法的な大きな転回であったというべきだろう。人間(魂)の本性(自然本来のありかた)を、悪にはなく、正義=自由(自律)に見出し、その本性に向かって主体的、実践的であるべきだ、と考えたのである。(注4)「(心に)想起こす」ことへの呼びかけは、この人間の本性に注意力を向け、人間が元来どういう存在であるかに気づいていこう、という意味をもっているのであろう。歴史的経験は特殊でありながら、根底に、特殊ではあり得ないもの=普遍的なものがあり、それ故に人間の連帯を心深く希求していくことが可能であることを想起こさせようとしているのであろう。

注1 引用する訳は、久保正彰訳『戦史』岩波文庫(上・中・下)による。したがって書名も『戦史』としておく。ギリシア語と英語訳との対応はLOEB CLASSICAL LIBRARYによる。

注2 トゥーキュディデースが、ラケダイモン( $\Lambda \alpha \kappa \epsilon \delta \alpha \iota \mu \omega \nu$  スパルタのこと)人が謀略をもって農奴たちを集団殺戮したことを暗示し、しかもだれも農奴たちの末路を知らないことを指摘する下りについては、訳者久保氏は、「人間は気付きたくないときには、気付かずにすむ。善良なるドイツ市民はユダヤ人惨殺について“知らなかった”という。史家(トゥーキュディデース…引用者)の言葉は誠に簡単な表現のうちにも、人間が人間である限り避けられない因業を千古の彼方から伝えている。」と注記しているが、私には、しば

しは『戦史』全編が現代史であるように思われてくる。

注3 トゥーキューディデースは、歴史を綴ることの自らの苦心について、つぎのように記述している。

「…しかし、戦争をつうじて実際になされた事績については、たんなる行きすがりの目撃者から情報を得てこれを無批判に記述することをかたくつつしんだ。またこれに主観的な類推をまじえることも控えた。私自身が目撃者であった場合にも、また人からの情報に依った場合にも、個々の事件についての検証は、できうる限りの正確さを期しておこなった。しかしこの操作をきわめることは多大な苦心をともなった。事件の起るたびにその場にいあわせた者たちは、一つの事件についても、敵味方の感情に支配され、ことの反面しか記憶にとどめないことがおおく、そのためにかれらの供述はつねに食いちがいを生じたからである。」

つづいて彼は、『戦史』執筆の動機・意図にかかわって、つぎのように述べている。

「また、私の記録からは伝説的な要素が除かれているために、これを読んで面白いと思う人はすくないかもしれない。しかしながら、やがて今後展開する歴史も、人間性のみちびくところ (κατα τὴν ἀνθρώπινοσ, in all human probability) ふたたびかつての如き、つまりそれと相似た過程を辿るのではないか、と思う人々がふりかえって過去の真相を見凝めようとするとき、私の歴史に価値をみとめてくれればそれで充分であろう。この記述は、今日の読者に媚びて賞を得るためではなく、世々の遺産たるべく綴られた。」

こう述べられている通り、『戦史』は、対立的な見地をよく浮かび上がらせながら歴史の真実に迫ろうとしている。その著者の、真実に迫ろうとする労苦とそれを支える批評精神のゆたかさには感銘を受ける。

ところで、つぎの一文は、(市販本)『新しい歴史教科書』(扶桑社、2001年6月)の前書き(「—歴史を学ぶとは—」)の一部である。周知のように、この「教科書」をめぐってはさまざまな論議されており、歴史学者からは史実に関する精緻な批判もなされているが(例えば、歴史学研究会編『歴史家が読む「つくる会」教科書』、青木書店、2001年11月)、私はこの教科書の前書きに記された、その道徳性のとらえかたに疑問をもつ。

「歴史を学ぶとは、今の時代の基準からみて、過去の不正や不公平を裁いたり、告発したりすることと同じではない。過去のそれぞれの時代には、それぞれの時代に特有の善悪があり、特有の幸福があった。」「歴史を固定的に、動かないもののように考えるのをやめよう。歴史に善悪を当てはめ、現在の道徳で裁く裁判の場にもすることもやめよう。」

不思議な、ひどく“主観的”な、そしてその裏返しとしての“虚無的”な印象を与える文章である。まず前提的なことであるが、このように書いて批判しようとする対象の把握が不明である。そういう疑問を前提に、さらに私は、本来一人ひとりの人間の内的なモラルである「善悪」「幸福」「道徳」というものを、このような文脈で使用する(“テーマ設定”すること自体に疑問をもつ。「歴史(学)」と「歴史教育(歴史教科書)」については、多くの探究が必要だと思うが、私は、モラルのありようについては、「歴史」は(“それぞれの時代”、それぞれの“国”、の内部においても)いつも全面一色なのではなく、矛盾をもっている(したがって、ことがらの内外に批判=創造・再発見の精神が潜んでいる)と考える。つまり、現実の歴史に身をおいて試練を受けつつ、(同一の「条件」のもとでも)さまざまな精

神が存在するのであって、そういうことの成り立ちを広範に問う歴史的探究は、人間の道徳性・文化というものの本質に光をあててくれる（想起の手立てになる＝反省の契機を与える）のだと考える。史実に対する注意深さが求められる、ということでもある。そこから見えてくるすぐれた歴史の遺産（精神＝文化）には、“時代”と“空間”を超える普遍性がある。「歴史」に向かうときには、そのような普遍性を探索する批判的＝探究的精神が不可欠であろう。私は、紀元前の史家トゥーキュディデースに学びつつ、「歴史学」には根本にそういう意志が要ると考えている。

注4 プラトーンは『国家』において、非常にリアルな現実観察（それは、ほとんど現代そのものでもある）にもとづく思考を展開し、そこにおいて「正義」（「不正」）を明らかにしようとしている。ソクラテース・プラトーンらの探究以前には、アデイマントス（*Ἀδείμαντος*）の発言として語られるのであるが、「『正義』と『不正』のそれぞれが、それぞれを所有している者の魂の内において、神々にも人間にも気づかれないうちに、それ自体としてそれ自身の力で、どのようなはたらきをなすか」ということは、詩においても散文においても、かつて一度も詳しく語られたことはなかった」のである。つまり、ソクラテース・プラトーンの時代において、人間本性についての意識的問いかけは重大な転回をとげたといえよう。（第二節の注1に関連する）

## 九 プラトーンの想起説と教育・文化の思想—記憶をめぐる—

日常生活（人間が生きること）と歴史は、諸条件はことなるけれども、その基礎においては、はるかに歴史を遡ってさまざまに繰り返しを行なっていると見ることができよう。そのような歴史的な諸経験（その類似性）を、人間に属することがらとして、自らの経験のうちに直感することはあり得るだろう。（注1）つまり、自らは直接的に経験しているわけではないが、経験しているように錯覚する（自らの心で経験していく）ということは、人間の能力＝想像力、したがって文化として、大切な意味をもっているだろう。（注2）この想像力（“錯覚”）を積極的に楽しみ味わう文学行為の一例として、ファンタジーというものを考えてみよう。

その例として、ルイス（C.S.LEWIS）作のよく知られている作品「The Chronicles of Narnia」シリーズを取り上げてみる。（瀬田貞二訳の『ナルニア国ものがたり』岩波書店、1966年、で読むことができる。以下の引用は瀬田訳による。）その最終巻『さいごの戦い』（The Last Battle）の最終場面で、つまりシリーズ作品全体の構造＝思想が明示されるというわけだが、つぎのような会話がなされていく。

…「あちらの山々は、」とルーシィ。「みごとな森のある山とそのうしろの青い山は、ナルニアの南の■境の山々にそっくりじゃないこと？」

「似てる。」と、しばらく沈黙がつづいたあとで、エドモンドがいました。「やあ、ほんとにそっくりだ。ほら、二つにわかれたみねのある二つ根山がある。アーケン国へ通ずる峠もあるし、全部そろってるよ！」

“似ている”が、しかし本物ではないのだ。著者ルイスは、物語のなかのディゴリー卿のことば

として、こう語っているのだ。「これはすべて、プラトンのいうところだ。あのギリシアのすぐれた哲学者プラトンの本に、すっかり出ているよ。やれやれ、いまの学校では、いったい何を教えているのかな？ (“It's all in Plato, all in Plato: bless me, what do they teach them at these schools?”)」

だから、上述の会話は次のように続くのである。

「でも、そっくりではないわ。」とルーシィ。「ちがっているわ。ずっと色どりがあつし、ずっと遠くにあるし…ずっと…ずっとなんだか…ああ、わからないわ。」

「ほんもの以上なんだ。」と静かにディゴリー卿がいいそえました。

ファンタジーというものを考えるとき、この『ナルニア国ものがたり』にみられるような、プラトーン (のイデア論) との結びつきは本質的であろう (ファンタジーの原型は、ホメロスの叙事詩にみとめられるが、しかしその起源は、遙かにはるかに遡ることになるであろうと私は予想する《注3》)。ファンタジーの世界には大きな広がりがあるけれども、それがファンタジーとして成り立つためには、その作品の根底に真実性、とくに正義 (悪) や勇気 (怯懦)、智慧 (無知) というものが、その作家の精神として見つめられていなければならない。その真実性が、鑑賞者の内部に、“懐かしい” 印象を呼び起こすのである。“人間としてのふるさと” というべきもの=記憶を直感させるのである (注4)。ここでいう記憶とは、人間の本性のことである。(注5) この関連は、ここではファンタジーを例に取り上げたが、実は狭義のファンタジー文学に限らず、広く文学や演劇・ドラマなどにも共通することであろう (このことは、さらには音楽や絵画的世界にも通用すると私は考えている)。(注6)

文芸・表現というものは、記憶の呼び戻しの営みなのである。文芸・表現によって、真実性に関わるものとして、私たちの能力は時空を超えるひろがりや深さをもつことになる。(注7) プラトーンの対話編においては、真実在を想起すること (思い出ゆえに憶れること) として、人間にとっての美 ( $\kappa \alpha \lambda \lambda \omicron \varsigma$  beauty) への愛 ( $\epsilon \rho \omega \varsigma$  エロス love) の意味が描かれている。(注8)

ところでプラトーンは、想起説に関連し、「記憶」について大切なことを述べている。プラトーン (ソークラテース) は、「話す」ということに相対する「ものを書く」ということを吟味する文脈において、聞いた話としてエジプト ( $A \iota \gamma \upsilon \pi \tau \omicron \varsigma$ ) の神話を語るのである (注9)。その神話では、発明の神テウト ( $\Theta \epsilon \upsilon \theta$ ) は、算術・計算・幾何学・天文学・将棋・双六などとともに、文字 ( $\gamma \rho \alpha \mu \mu \alpha \tau \alpha$ , letters) を発明したのである。テウトは、それらの技術 ( $\tau \epsilon \chi \nu \eta$ , art) の有用性を、エジプトの至高神タムース ( $\Theta \alpha \mu \omicron \upsilon \varsigma$ ) に説明したのであるが、文字については、つぎのように述べたというのである。

「王様、この文字というものを学べば、エジプト人たちの知恵はたかまり、もの覚えはよくなるでしょう。私の発見したのは、記憶 ( $\mu \nu \eta \mu \eta$ , memory) と知恵 ( $\sigma \omicron \phi \iota \alpha$ , wisdom) の秘訣なのですから。」

このテウトの説明に対しタムースは、「たぐいなき技術の主テウトよ、技術上の事柄を生み出す力をもった人と、生み出された技術がそれを使う人々にどのような害をあたえ、どのような益をもたらすかを判別する力をもった人とは、別の者なのだ。」と述べ、「人々がこの文字というものを学ぶと、記憶力の訓練がなおざりにされるため、その人たちの魂の中には、忘れっぽい性質 ( $\lambda \eta \theta \cdot$

η, forgetfulness) が植えつけられることだろう」と語るのである。そして、つぎのように言ったというのである。

「彼らは、書いたものを信頼して、ものを思い出すのに、自分以外のものに彫りつけられたしるしによって外から思い出すようになり、自分で自分の力によって内から (ε ν δ ο θ ε ν α υ τ ο υ ς) 思い出すことをしないようになる…。じじつ、あなたが発明したのは、記憶 (μ ν η μ η, memory) の秘訣ではなくて、想起 (υ π ο μ ν η σ ι ς, reminding) の秘訣なのだ。」

プラトーンは、タムースのことばとして、自分自身の一部ではない外部的なものに記されたことさらに信をおくということは、自分の内部にある自分自身の記憶を使おうとすることを萎えさせるのであり、そういう意味で文字は、記憶の靈薬とはいえず、むしろ思い出すための靈薬なのだ、というのである。つまりプラトーンは、文字（記述されること、ものを書くということ）のもつ効能の両面についてよくわきまえるように、と述べているのである。ここでもプラトーンは、「記憶」というものの原義に関わって、外部的な知識を単に保持することとは異なるものとして、自分自身の内部にあって想起し、ということの本質性を述べている。(注10)

そしてプラトーンは、そういう「書かれたことば」(注11) に対し、「対話」におけることばというものの価値について、つぎのように語るのである。

「…しかし、ぼくは思う、そういった正義その他に関する事柄が、真剣な熱意のもとにあつかわれるとしたら、もっともっと美しいことであろうと。それはほかでもない、ひとがふさわしい魂 (ψ υ χ η σκυ) を相手に得て、ディアレクティケー (δ ι α λ ε κ τ ι κ η, dialectic) の技術を用いながら、その魂の中に言葉を知識とともに (注12) まいて植えつけるときのことだ。その言葉と言うのは、自分自身のみならず、これを植えつけた人をもたすけるだけの力をもった言葉であり、また、実を結ばぬままに枯れてしまうことなく、一つの種子を含んでいて、その種子からは、また新なる言葉が新なる心の中に生れ、かくてつねにそのいのちを不滅のままに保つことができるのだ。そして、このような言葉を身につけている人は、人間の身に可能なかぎりの最大の幸福を、この言葉の力によってかちうるのである。」

このように、「ふさわしい魂を相手に得て」と述べているように、「対話 (問答)」は、自分の存在をもって、一人の人格ある青年 (子どもの) のその魂 (ψ υ χ η プシユケー) と語るのである。(注13) 自分の本性をもって、一人ひとりの子ども (その子の本性) と語るのである (プラトーンが描く対話編の青年は、しばしば個性的である)。おそらくプラトーンは、ソクラテースから根底的な影響を受けたのであろう。あるいは、プラトーンの内面は、ソクラテースの思想の秘密=核心 (源泉) を感受する良さをもっていたのであろう。あるいはプラトーンは、ソクラテースの思想と生き方 (死に方) (注14) から感受したものを、深く吟味し、自らが把握し直していったのであろう。つまりプラトーンは、ソクラテースという人格・思想との出会いから受けた、ある総合的な根底的な直感に導かれながら、ソクラテースに内在する思想の継承を意識しつつ、深い感動の念をもって、自身の思想を展開していったのであろう。

そのソクラテースは、書き記すことはしなかったのである。わけ隔てなく、青年たちと対話をおこなったのである。お互いの生きた人間人格 (人間の魂) を前提にして、「生命をもち、魂をも

った言葉」(『パイドロス』)を交わしたのである。こういう言葉を交わすということ(διδασκαλο-  
γοςディアロギス 対話・会話、διδασκαλετικηディアレクτικη 哲学的問答法)に  
よって、つまり教育によって、若い魂に(そしてプラトーンに)芽を宿らせたのである。(注15)

そしてそのプラトーンは、「正しきもの、美しきもの、善きものについての教えの言葉、学びの  
ために語られる言葉、魂の中にほんとうの意味で書きこまれる言葉」をこそ大切に、そのような  
言葉が「自分自身(話し手…引用者…)の中に見出され内在」し、同時に「何かその子供とも兄  
弟ともいえるような言葉が、その血筋にそむかぬ仕方ではほかの人々の魂の中に生れ」ること、を願  
ったのである(『パイドロス』)。(注16) 私は、プラトーンのこの願いのなかに、文化・教育(自己  
教育・相互教育)の原理=思想が凝縮されていると考える。

注1 古典を現代において再発見していくことは、本質的に可能なことなのだ。多くのたいてい  
のことは、すでに古人が、世界の各地で悩み、考え、提案しているのだ。私たちの「探究」  
ということも、今の私(たち)の問いを育みながら、そうした古人の思想との会話をさが  
す=共通性・普遍性を見出すということが、そのクリエイティブなるものの中心的なことが  
らになるのだろう。

注2 最近、デジャヴュ(deja vu既視感)ということばが多く使われる。初めての経験でありな  
がら、いつかどこかで経験したような感じ、という意味のことであるが、このことばは、  
2001年「9月11日」の、衝撃的な事件のテレビ映像をみたときの感想(新聞コラム)でも何  
度か使われていた。もちろん、「いつか見た」というのは、健康な常識としては一つの錯覚  
なのである。しかし、錯覚を意識し気に留めることは、人間の健康な感覚(すべてを忘却—  
ληθηレーター—しきってはいないという証)なのであろう。

注3 古代エジプトを含め、地中海を航路とする諸文明の交流の意味は、ギリシアの思想の成り  
立ちを理解する上で決定的であろう。なお、ヘロドトス(Ηρόδοτος)の『歴史』  
(松平千秋訳の岩波文庫上・中・下)は、文明交流についてさまざまなヒントを与えてくれ  
る。

注4 「思い出μνημη memory」を「憧れるποθειω yearn for」、とも言われることが  
らである(『パイドロス』)。「自分探し」といわれるものも、その根底にはこの「憧れ」があ  
る。私は、子どもと大人との対話のほんとうの意味は、この憧れの感覚の共有にあると考  
えている。憧れの感覚は、多くの場合、喜ばしいこと、美しいこと、本当のこと、つまり、面  
白いこと、楽しいこと、興味深いことに触れて目覚め、育つのである。私は、文芸・美的表  
現世界および教育思潮におけるいわゆる「リアリズムrealism」も、本質においては実在論と  
の脈絡で、同様の原理が伏在していると考えている。

注5 真実在を「記憶」ということとの対応で、「忘却ληθη forgetfulness」と「悪徳κα-  
κακια evil」とは一つながりのことになる(『パイドロス』)。このことは、歴史と人生の  
教訓として、絶えず“現代的”である。なおプラトーンは、国家の最もすぐれた守護者の資  
質に関わって「よく記憶を確保する者」のことを述べているが、その対比として、「言葉」  
(λογος, argument)によって「考えを変える人々」と「時」(χρονος, time)によ  
って、「考えを忘れてしまう(επιλαθωνοματι, forget)人々」などを批評してい  
る(『国家』)。

注6 ルイスは、プラトーン思想として、「真実在」(ουσιαウーシア)と「似姿」(似

像」(ομοεισμοα)との関係のことを言っていると見てよいだろう。fantasyに対応するギリシア語φαντασσια(パンタシア)は、「現れ」「現象」「見かけ」「表象」という意味をもつ。なおプラトーンは、同族語のφαντασσιαを、人間を誤らせるものとしての「幻影appearance」という趣旨で使っている(『国家』)。

注7 たとえば戦争も、一人ひとりの生死についても、歴史的なものとして=人間本性にかかわるものとして、私たちは経験しているのである。文芸・表現は、そういうものの想起の、人間にとって不可欠な方法なのであろう(歴史学は、想起の練磨=批判の方法のように思われてくる)。

注8 美に出会ったときの感動=忘我というべき経験の意味を、『パイドロス』は描いている(「…この世の美を見て、真実の美を想起」する)。それは、真なる自分に出会うという経験のことでもあろう。真実在(美しき人)を直感し愛する(恋い慕う)者を、プラトーンは「狂気μανιαμανιαーmadness」ということばでとらえている。私はこの「狂気」(「マニャー」には、「熱狂、熱情」という意味もある)ある様を、プラトーンの“ソークラテース像”としてもイメージしている(そして、まことに歴史は、真に自律した人間を社会的に排斥するということを繰り返していると、改めて思わせられる…第6節の注9に関連する)。

なおプラトーンが描く、恋する人間(εραστης,lover)が恋される者(πασιδικα, the loved one)に接していく(\*) (「自分の主であった神の本性を自分自身の中から発見しようとしてたずねて行く…」)様は、教育原論として読むべきものだと考える。

\* 少年への恋κλεισεραστια(homosexuality)のこと。当時、heterosexualな関係をもちつつhomosexualな関係をもつことは、ギリシア社会の富裕な有閑階級において(彼らのライフサイクルの一定の時期に限られるようであるが)、ノーマルなこととみなされていたようである(“The World of Athens—An Introduction to Classical Athenian Culture”, Cambridge University Press, 1984)。なお、『パイドロス』、及びやはり少年愛を論じている対話編『ΣΥΜΠΟΣΙΟΝ(饗宴)』を理解するうえでは、少年愛は愛・美の本性の探究のこととして理解すればよいと思う。

そこでは、成りゆく人間の像として、「自己自身の支配者となり」、「端正な人間」となる、と描かれているが、「端正な」と訳されているκοσμιος(orderly)には、「規則正しい」の値、「節度のある」「中庸を得た」「慎み深い」「まっとうな」(well-ordered, regular, moderate)という意味があり、名詞形τοκοσμιος(トコスミオス)にはdecorum, decency, orderという意味がある。なお同属語のΚΟΣΜΟΣコスモスは、宇宙、天空、秩序、きちんとしていること、などの意味をもつが、good order, good behaviour, decencyという意味がある(前出のLIDDELL AND SCOTT'S GREEK-ENGLISH LEXICONを参照する)。

このギリシア語κοσμιοςは、「απλοτηςアプロテース(simple)」「(単一)」「素朴」「誠実」「純情」ということば(『国家』)とともに、自己教育思想=教養思想(人間像)を示しているものとして、見過ごすことができない。なお、大江健三郎氏が日本語に翻訳することなく大切にしているディーセント(decent)ということば(「まっとうな」「ちゃんとした」「感じのいい」といような意味)は、おそらくこの「コスミオス」のような思想を含意しているのであろう(『恢復する家族』講談社、1995年、など)。

注9 『パイドロス—美について—』

注10 それは、「教養」というものの本性の主張でもある。タムースのことばは、つぎのように続いていく。「あなた（タムース…引用者）がこれを学ぶ人たちに与える知恵というのは、知恵の外見であって、**真実の知恵**ではない。すなわち、彼らはあなたのおかげで、親しく教えを受けなくてももの知りになる( $\pi\omicron\lambda\upsilon\eta\kappa\omicron\sigma$ , read many things)ため、多くの場合ほんとうは何も知らないでいながら、見かけだけはひじょうな博識家 ( $\pi\omicron\lambda\upsilon\gamma\upsilon\omega\mu\omega\nu$ , know many things) であると思われるようになるだろうし、また知者となる代りに知者であるといううぬぼれだけが発達するため、つき合にくい人間となるだろう。」このことばは、知識が人格とはなれて“流通”させられていくという、現代の“情報化（社会）”や“生涯学習（政策）”の本質的一面を批評しているようでもある。あるいは、記されたものによって真に想起していくだけの力量を、私たちに試しているようでもある。

注11 ものを「書く」ということに対しては、プラトーンは、「長い時間かかって、ここを削ってあそこにつけ加え、あそこを削ってここにつけ加えるといったふうに、あれこれと文句をひねくり返しながら組み立てたり書いたりした、その当の作品以上に価値のあるものを自己の中にもっていないような人」と言い表しているように、自戒の念をもととしてしているようである（『パイドロス』）。ここで言われていることは、私たちが、ある人の口から自分に向かって生きいきとした言葉がつむぎだされたときに、“一回限りの真実性にみちた瞬間に出会った”と感動する、そのことの意味を裏付けてもいる。

注12  $\mu\epsilon\tau' \epsilon\pi\iota\sigma\tau\eta\mu\eta\varsigma \lambda\omicron\gamma\omicron\upsilon\varsigma$  を THE LOEB CLASSICAL LIBRARY では、intelligent words と訳しているが、日本語訳としては、藤沢訳のような直訳的対応が良いだろう。

注13 対話編の『プロタゴラス  $\Pi\rho\omega\tau\alpha\gamma\omicron\rho\alpha\varsigma$ 』でも、「自己自身の声と自己自身の言葉によって互いに交わる」「自分自身の言葉のなかでお互いの力量をためしためされつつ、自己自身のもっているものだけを頼りに、お互いに直接相手とふれあう」ということを強調している（訳は、藤沢令夫氏による岩波文庫版）。

注14 プラトーンは、『パイドーン』において、その論旨にかかわるものとして、「真正に哲学する人人は死ぬことを練習しているのであって ( $\omicron\iota \omicron\rho\theta\omega\varsigma \phi\epsilon\lambda\omicron\sigma\sigma\phi\omicron\upsilon\nu\tau\epsilon\varsigma \alpha\pi\omicron\theta\nu\eta\sigma\kappa\epsilon\iota\nu \mu\epsilon\tau\epsilon\lambda\omega\sigma\iota$ , the true philosophers practice dying)」ということを繰り返して述べている（訳は、前出藤沢訳による）。ソクラテースの死は、不意に訪れたものではなかったのである。またモンテーニュは、その『エッセー』の第二十章「哲学をきわめるとは死ぬことを学ぶこと QUE PHILOSOPHER, C'EST APPRENDRE A MOURIR」において、「キケロは、哲学をきわめるとは死の準備をすることにほかならない、と言った。これはつまり、研究や瞑想が、ある意味でわれわれの精神をわれわれの外に引き出し、肉体と離して働かせるからで、いわば、死の練習 (apprentissage de la mort)、模倣のようなものだからである。あるいは、世のあらゆる智恵と理論が、結局は、われわれに死を少しも恐れないように教えるという一点に帰着するからである。」と述べている（訳は、前出の原二郎訳の岩波文庫版による）。なお、大江健三郎氏のエッセー「吟味された言葉」には、光氏の「元気を出して、しっかり死んでください！」という発言についての思索があり、心引かれる（『回復する家族』講談社、1995年）。

注15 1950年代の、大田堯氏の“ロハ台の実践”の本質は、このような文脈での「会話」にある

と考える。“ロハ台の実践”の記録は、そういう「会話」の記録（会話の意識化）なのである。ところで、生活綴り方や共同学習（運動）において一般に注目されるのは、＜書くこと＞である。それ（＜書くこと＞）は、一人ひとりの魂（ψυχη）を呼び戻すことに本質があるのであって、＜書くこと＞が＜話すこと＞の上位にあるということではないだろう（大田氏が＜話すこと＞＜書くこと＞＜生きること＞と記しているのも、それは順序のことではなく、会話が基調にあって全体が相互に浸透していくことを示しているように思える）。むしろだれの心にも、その底には、会話＝相互教育（\*）の世界の深まりということが願望されていて（本質的目標としてあって）、＜話すこと＞はその出発から帰結までの基線となるはずのものだろう。私は、この会話（対話）＝相互教育を考えると、プラトーンの諸「対話編」の基調にある、対話としての思想は、原典の意味をもつと考えている。なお、“ロハ台の実践”については、拙論「＜ロハ台＞の会話の広場から学ぶ—1950年代の共同学習・生活記録運動を見つめ直す視点」（北田耕也・畑他編著『地域と社会教育—伝統と創造—』学文社、1998年、所収）を参照されたい。

\*相互教育とは、相互が働きかけあって（相互に影響を受けあって）成長することである。

注16 事実、プラトーンの対話編には、それぞれの展開部自体に面白さ＝充実した内容があり、しばしばそれが終結部において総合的高みに達し、余韻をもって終わるのであるが、そこに込められた思想・感情は、読み手に宿し、独自の生命力をもって動き出すようである。

【パイドロス】の最終部では、次のような（ソクラテースの）感銘深いことばが語られている。「親愛なるパンよ、ならびに、この土地にすみたまうかぎりのほかの神々よ、この私を、内なるところにおいて（in my soul within）美しい者にしてくださいませように。そして、私が持っているすべての外面的なもの（all external possessions）が、この内なるものと調和いたしますように。私が、知恵ある人をこそ富める者と考え人間になりますように。また私の持つお金の高は、ただ思慮ある者のみが、にない運びうるほどのものでありますように。」